

平成30年度 千葉市・千葉大学公開市民講座 講演録

千葉氏とアイデンティティ

— 軍記物語の語るもの、近代の人々のいとなみ —

平成31年2月9日

千葉市・千葉大学



平成 30 年度 千葉市・千葉大学公開市民講座
主催：千葉大学 千葉市 千葉市教育委員会
後援：千葉興業銀行 千葉日報社

2019 2月9日(土)

開催時間 13:00 ~ 16:15

開催場所 千葉大学西千葉キャンパス
けやき会館大ホール

講演1「千葉氏」をよりどころとした
人々の〈歴史〉

ー「千葉町」から「千葉市」へー

講師：久保 勇 氏（千葉大学大学院人文科学研究院・准教授）

講演2「源平闘争録」が語る

千葉氏のアイデンティティ

講師：源 健一郎 氏（四天王寺大学人文社会学部・教授）

募集人数：300 名

申込期間

平成 30 年 12 月 20 日（木）から

平成 31 年 1 月 25 日（金）まで

千葉大 公開市民講座

検索

参加
無料

「軍記物語の語るもの、近代の人々のいとなみ」

千葉氏と
アイデンティティ



【開催前】

会場となったけやき会館
当日は雪模様



ロビーに設けられた
川島屋のコーナー



千葉ブランドの銘菓を販売



植田教授研究室で開発された
万祝グッズのコーナー



【開会】

司会
千葉大学 植田教授



開催挨拶
千葉大学 山田理事・副学長



【講演 1】



講演 1 の講師
千葉大学 久保准教授



【講演 2】



講演 2 の講師
四天王寺大学 源教授





【クロストーク・質疑応答】



【閉会】

閉会挨拶
千葉市立郷土博物館 朝生館長



千葉氏とアイデンティティ

—軍記物語の語るもの、近代の人々のいとなみ—

本公開講座では、千葉氏をめぐる「アイデンティティ」について、＜千葉氏がよりどころとした物語＞と＜千葉氏をよりどころとした地域の人々の歴史＞という両面から考えていきます。千葉開府900年記念に向け、現代の「わたしたち」のよりどころとして、千葉氏の物語と歴史を共有していく「場」になれば幸いです。

■ 開催挨拶 13:00

■ 【講演1】13:10～14:10

「千葉氏」をよりどころとした人々の＜歴史＞

—「千葉町」から「千葉市」へ—

講師：久保 勇（千葉大学大学院人文科学研究院・准教授）

現在、千葉開府900年に向けて、千葉市ではさまざまな取り組みがされています。開府記念事業は、市制施行（1921）の5年後にあたる「千葉開府八百年祭」（1926）から始まり、昭和51年（1976）の「千葉開府850年式典」へと受け継がれてきました。本講座では、近代に入って千葉の人々がどのように「千葉氏」をよりどころにしてきたのか、明治の千葉町の当時から千葉市の八百年祭に至るまでを射程に、その＜歴史＞を考えていきます。

■ 【講演2】14:25～15:25

「源平闘諍録」が語る千葉氏のアイデンティティ

講師：源健一郎（四天王寺大学人文社会学部・教授）

「源平闘諍録」は『平家物語』の一異本です。源平合戦期の千葉氏の歴史を、妙見信仰の文脈から語ることでよく知られています。本講座では、妙見信仰に武家故実の観点を加え、中世千葉氏が源氏との関係をどのように捉えていたのか、考えてみたいと思います。

■ 【クロストーク・質疑応答】15:35～16:10

■ 閉会 16:15

目次

開催にあたって（山田 賢）	1
趣旨説明（司会 植田 憲）	3
【講演1】「千葉氏」をよりどころとした人々の歴史Ⅴ ——「千葉町」から「千葉市」へ——（久保 勇）	4
資料	20
【講演2】「源平闘諍録」が語る千葉氏のアイデンティティ（源 健一郎）	32
資料	44

開催にあたって

山田 賢(千葉大学理事・副学長)

皆様、ようこそいらっしゃいました。ただいまご紹介に預かりました、千葉大学広報、情報、地域連携等を担当しております理事、副学長の山田でございます。本日は本当にお足元の悪い中、平成三〇年度千葉市・千葉大学公開市民講座、「千葉氏とアイデンティティ」にお運びいただき誠にありがとうございます。千葉市、千葉大学の主催者側を代表いたしまして、ご参加くださった皆様に深く感謝申し上げます。さて、本日の講座のチラシをご覧ください。こちらは、既にお気づきと思いますが、チラシに使用しております写真は、千葉開府八百年祭、つまり今からほぼ百年前に撮影されたものでございます。この頃から千葉という街の起源は、現在の亥鼻近辺に本拠を置いた、中世の千葉氏に求められていたわけです。本日の講座は二〇二六年開府九百年を迎えようとしている千葉という地域の歴史的伝統について扱うものでございますけれども、学術としての歴史学において、伝統を考える際、実はいくつか難しい課題が存在してございます。冒頭のご挨拶において、いったい伝統とはそもそも何なのかという議論を行うことは避けたいと思いますけれども、

少なくとも一つだけ言えることは、伝統とは過去そのものが、そのままのかたちで、現在まで継承されているというものではなく、決してないということです。ある時代を生きた人々は、膨大な過去の中から、記憶しておきたい特定の過去、それを選択したうえで、顕彰をします。ほめたたえようとするわけです。そして、またその次の時代を生きる人々は、たくさん過去のの中から生みだされた、たくさん

の伝統の中から、さらにそれを受け継いでいきたい、言い換えれば、われわれにとって望ましいと考えられる伝統を再び選択したうえで、継承していかうとするわけです。つまり伝統というものは、世代から世代を経て、何度も選択し直されているものであるゆえに、過去の事実そのままではなくなっているかもしれないということがあります。こう申し上げますと、本日のテーマである千葉氏の歴史・伝統に対して、懐疑的であるかのように、受け取られるかもしれませんが、それでも、私の申し上げたいのは、伝統に対する懐疑、伝統の価値に対する否定ではありません。むしろ全くその逆であります。



伝統というものは、常にのちの世を生きた人々にとって、改めて選
び直され、いわば生き直されることによって、初めて生命を吹き込
まれる。そしてさらに次の世代へと継承されていくものでありま
す。だとすれば、この先、開府九百年、そしていずれ千年を迎えるで
あらう千葉の歴史も、今を生きる私たちが、改めてこれを選択して、
尊重し、そしてこの伝統を生きることによって、初めて次の世代に
受け渡されていくのだろうというふうに思います。そのように考
えるならば、いわば本日の公開講座が、私たちが千葉の伝統を改め
て生き直すためのささやかな試みの一つということになるのかも
しれません。なお、今回の市民講座開会にあたりましては、多くの
皆様のご支援をいただいております。千葉県の歴史をテーマに掲
げたコスモスセミナーを長年にわたって実施してこられた千葉興
業銀行様。それから千葉という地域に根ざした報道機関である千
葉日報様。この両者には、ご後援をいただいております。またこの
悪天候の中、川島屋様には千葉ブランド銘菓創造委員会の共同開発
になる千葉集、千葉に集めると書くわけですが、そのお菓子を
をお持ちいただき、ホール入口脇で販売していただいております。
これもまた千葉の歴史に根づいた、千葉ならではの郷土のお菓子を
作りたいという思いから、開発されていったと伺っておりますので、
言ってみれば、伝統の生き直しの一つと言えるのかもしれない。
ほかにも本日の司会でもある千葉大学工学研究院植田教授研究室
で開発された万祝グッズなども、展示してございます。講座の合間

などに、ぜひご覧いただければと思います。本日はあいにくの寒い
雪の日となりましたけれども、このホールでは熱い講演とディスカッ
ションが展開されるだろうということで、大いに期待しております。
そしてこのコンディションの中でも、開催にこぎ着けることができ
ましたのは、関係者各位のご尽力はもちろんですけれども、何より
もこのホールに集まってくださった参加者の皆様の熱意あつての
ことでございます。改めて感謝の言葉を申し上げ、私の最初のご挨拶に代えさせていただきます。本日はありがとうございます。

趣旨説明

司会 植田 憲(千葉大学大学院工学研究院教授)

司会の私のほうから、今回の公開市民講座について、若干ご説明をさせていただきたいと思います。現在、千葉市が千葉開府九百年に向けた、さまざまなアイデンティティ推進事業を進めておられます。



そうした中で、千葉氏につきまして、千葉大学と連携し、市民の皆様と、その歴史と文化を共有しようという取り組みが昨年度より始められております。前回はこちら一年前、二月三日に平成二九年度千葉市・千葉大学公開市民講座というかたちで、千葉常胤生誕九百年記念をテーマに、この千葉市・千葉大学公開市民講座を開催させていただいております。その後、千葉市と本学とで、この公開市民講座

を引き続き開催するという運びとなり、本日、「千葉氏とアイデンティティ―軍記物語の語るもの、近代の人々のいとなみ―」と題して開催をするに至っております。

既にポスター、チラシ等でご案内をしておりますが、本日のテーマにつきまして、改めてご紹介をさせていただきたいと思います。千葉氏をめぐるアイデンティティについて、千葉氏がよりどころとした物語と、千葉氏をよりどころとした地域の人々の歴史という両面から考えていくと、そういった今回の講演のテーマでございます。そうすることで、千葉開府九百年記念に向け、現代の私たちのよりどころとして、千葉氏の物語と歴史を共有していく、そんな場になればということで、今回の講座を開催させていただいております。このアイデンティティという言葉ですが、実は当初から、アイデンティティについて語っていいこうというかたちではございませんでした。今日、ご登壇いただきます久保先生、それから源先生、お二人でさまざまに話し合っていたところ、共有されるテーマとして、よりどころというかなたちが見いだされたということでございます。よりどころですので、すなわち、千葉氏のアイデンティティ、そんなかたちで、今日の講座進められたらと考えております。こういった経緯も含めまして、のちほどクロストークもございいますので、そちらでもぜひお聞きいただければと存じます。

【講演1】

「千葉氏」をよりどころとした人々の〈歴史〉 —「千葉町」から「千葉市」へ—

久保 勇（千葉大学大学院人文科学研究院 准教授）

講師紹介

司会 講師の久保先生を私からご紹介をさせていただきます。久保勇先生については、ご存じの方も、多々おられるかと存じますが、実は二〇一〇年から、この全学の千葉大学公開市民講座で、ご講演はもとより、企画運営に関しても大いに携わってこられました。ご出身が千葉大学の文学部大学院修士課程で、博士課程を経まして、二〇〇〇年に大学院社会文化科学研究科の助手となられ、現在は大学院人文科学研究院の准教授をされておられます。ご専門は軍記物語の研究。延慶本『平家物語』の研究。『将門記』や後三年記など、『平家物語』以前の軍記物語についても、対象とされておられます。最近では、本日の講演内容にも含まれるそうですが、近代における地域社会に軍記物語の知識や伝承などがどのように残されているか、そんな課題に取り組まれているということでございます。本日は「千葉氏」をよりどころとした人々の〈歴史〉—「千葉町」から「千葉市」へ—という論題にて、ご講演をいただきます。久保先生、どうぞよろしくお願いいたします。【画面1】（※画面番号は20ページからの各資料左上の番号に対応）

【画面2】ただいまご紹介にあずかりました千葉大学の久保です。ご紹介いただいた通り、この公開市民講座は、昨年もやらせていただいて、今年是这样したタイトルで担当させていただくということになります。皆さんのお手元にある配付資料は、これから画面で提示いたしますが、一部省かれております。お手元になくても良いような画面は削除しておりますので、ご了承ください。では順を追って進めてまいりたいと思います。画面は開催案内に書きましましたもので、今回私が注目したのは「開府記念事業」であり、直近となる「八百五十年式典」につきましては、本日いらっしゃっている方々の中には、まだご記憶にある方も多いかと存じます。それ以前の「八百年祭」—さすがに八百年祭を経験されたという方はおられないと思いますが—、先ほど山田理事よりお話がありましたように、「開府九百年に向けて」という視点、すなわち現代に生きる私たちがとりわけ「千葉」で生活する私たちが「開府記念」というものを「伝統」としてどう捉え直せるかという問題、こうしたことに注目してまいりたいと思います。

一 問題の所在―これまでの研究から



【画面3】ちょうど昨年度、―この画面は皆さんのお手元にはありませんが―千葉市と「平成29年度千葉市・大学等共同研究事業」ということで、私が代表となり「千葉氏」と市民に関する研究」というものをおこないました。一年間で、時間が限られておりまして、成果が上げられていない部分もあるのですが、会場入口のところに「見本」として『報告書』を置かせていただいております。これは、近現代の千葉氏を掘り起こすというか、考え直してみようという試みの研究で、昨年度させていただいたわけです。そこには、二つ目標を掲げまして、1として挙げましたのは「人々が「千葉氏」を受け止めた歴史にかかる基礎的資料を収集整理することにより、千葉氏にかかる魅力あるコンテンツを整備すること」でした。『報告書』に挙げたことはすべてではございませんし、転載した資料の方も読みにくい部分が多いのですが、ともかくもそれらを形にしたものが、この『報告書』であります。そして二つ目の目標と

いうのは―これは大学の授業で本当に試験的に試みたんですけれども―、「大学生が千葉市らしさをプロデュースしていく」ということを、具体的には「千葉氏」の歴史を通して、それをどのくらいできるかということを経験的にやってみました。残念ながら継続はなかなかできておりませんが、やはりまだ学生たちに投げかける側（＝教員）が、材料となるコンテンツを提供する準備が進んでいない、という状況が反省されるところです。やはり、こちら側が千葉氏の歴史をいくら授業で説明しても、大学生（受講生たち）が、どの部分に関心を示すかという焦点が、個々の学生によってまちまちであり、なかなか一年間の受講生と接した蓄積だけでは、その魅力というものを引き出すことが困難であった、という結果であります。

【画面4】昨年度以前では、先ほど紹介していただきましたが、平成24年の公開市民講座で「戦いの記憶と房総」というテーマで、今日お話しする一部、たとえば近代における房総の千葉氏研究というのが、初期社会主義者たち―白鳥健（しらとり・たけし）であるとか、吉田璣（よしだ・たまき）といった人々―によって成されるようになったと





と壇の浦』という本があります。これを書いたのは「市原隆作」という人で、学校の先生だった方ですが、明治の末年にこの本を出すにあたって、屋島と壇ノ浦の史跡探訪をされているわけです。この人が千葉県出身ですが千葉市ではなく、睦沢―当時の土睦村―出身の方なのです。この本というのは、明治末から大正にかけ、屋島・壇ノ浦の観光案内としてとても売れた本でして、かなり短期間で版を重ねている本なのです。そこで、こうした調べをしているうちに、夏目漱石と市原隆作とに交流があったことなども出てきました。漱石の日記に市原隆作と出かけた、という記事があるのですが、近代文学研究の方々には「市原隆作」という人物が何者かわからな

いような話をさせていただきました。一方で、個人研究では平成25年度から現在に至るまで続いておりますが、近代になって軍記物語が『平家物語』が中心なのですけれども、地域の「史跡」とか「伝説」とか、郷土史の記述とか、どのように残され伝えられているのかという問題を研究しております。それで、前の画面に挙げました―上の段ですが―、『悲壮史蹟 屋島

い、ということ（＝漱石全集解説）でしたが、私からは「あ、この市原隆作か」と気付くという、こうした付加的なことも発見されました。加えて、この期間注目したとき、顕著にわかったことといたしまして―今日の話でも出てきますが―、明治・大正・戦前期、『平家物語』に内容から「史跡」になるとか、地域の「歴史」が記述される、という時に、だいたい各地方で共通して起きていることがあるのですが、想像つく方はいらっしゃいますかね？ 明治・大正期の地方史とかの問題です。『平家物語』の―たとえば北陸の史跡（倶利伽羅合戦史跡）とか―、史跡が小冊子になったり、史跡案内地図になったりするということが起きるきっかけということです。一つは、天皇が各地を巡行する―明治天皇の巡行でありますとか皇太子の行啓とか―、つまり一つの国家的事業のなかで、今まで存在は理解していたけれども、その御姿まで拝することのなかった地方の人々が「自分が日本国民である」という経験を現実として認識する過程です。そこで地域は地域で、「国」の中の自治体として、各地域を代表する「歴史」とか「伝説」というものを、他の地域に示すとき、誰もが知っている「源平の史跡」を表に出してくるというわけです。この傾向は各地で見受けられるもので、たとえば屋島ですと―屋島のあのロープウェイの上ですけれども―、皇太子とか皇族があそこを登られたということが、その地域にとっては歴史的な出来事として、源平合戦の「記憶」とともに刻まれていくことになります。もう一つの源平の「記憶」が呼び起こされる契機というのが―今日最後のほうで時間があ

れば紹介いたしますが、明治に開催された「共進会」。ご存じだと思いのすけれども、各職種の「共進会」というのが、全国の同業者へ向けて各地で開催されるわけです。その「共進会」開催のときには、全国各地から開催地にお客さんがたくさん来るわけです。おおよそ開催期間も二週間ほどで、必ず開催地域の観光案内とかパンフレットが作成されるわけです。その際に、やはり現地の「歴史」とか「伝説」、誰もが知っているようなことというのが、やはり『平家物語』に描かれているような「事件」でありますとか「人物」にかかわるものでして、それらが「共進会」の会場案内に関わる媒体で紹介されているわけです。ちよつと結論を先取りするようですが、「地域がほかの地域と相対化されるとき」が問題になるわけです。自分たちの地域は何なのだというような。いま、たとえばグローバル化する社会で、各国が内に向いていくという傾向と同じことなのでしょうが、やはり外の人たちが来るという状況になった時、各地の「歴史」とか「伝説」というものが発見されていく、という傾向は見て取れるわけで、そのような研究をいま進めております。

二 近代から千葉と千葉氏を考える

【画面5】本題に入りますが、最初に「開府をめぐる」という画面です。皆さんのお手元にある資料で、こちらは「開府八百五十年」の記念誌に掲載された新聞記事を転載させていただいたもののな

ですが、昭和51年5月に八百五十年記念事業を実施するにあたっての新聞記事で、線を引いたところです。『読売新聞』が「ところがどうも理解しがたいのが、「開府八百五十年」として、その後『広辞苑』を引いて、開府という語彙を調べると該当しない。さらに下の段の線を引いたところですから、八百五十年前に、現在の千葉市の「基盤」ができたとはいっても、「開府」とは、言葉がすぎるのではないか。つまり、「開府」というのは不適切ではないかという、疑問を提示しているわけです。この問題は、正直に申しますと、昨年郷土博に向けて似た質問がありまして、「先生、どうですか」と、私が郷土博から聞かれた時、ちよつと調べたことであるのです。けれども、こうした時に（読売新聞のように）いくら辞書引いても駄目なわけなのです。

【画面6】そこで次の画面ですけれども、では「開府」（記念）ということ、千葉市以前にやっていたのだろうか？と、調べていきますと、次々に出てくるわけです。江戸は幕府がありますから、「開府」と称しても不適切ではないわけですが、まず「東京三百年記念祭」があり、明治22年8月に「東京開府三百年ノ祝典ヲ舉グ」と書いてあります。東京が「開府」と称するのは当然なのですが、その後、各地でどうだったかと調べていきますと、名古屋で「三百年祭」が実施されています。これは家康が名古屋に入るとか、名古屋城築城という時期から起算して「名古屋開府三百年祭」となったわけです。深くは調べておりませんが、当時大々的に名古屋で諸行事が行われたようで、近くは

「開府四百年記念祭」が名古屋で再び行われています。昨年がちょうど「開府四百年記念」でありまして、ホームページ等に特集ページがありますので、ご覧いただければ、写真等を見ることが出来ます。また、大正6年（一九一七年）の5月に長岡では「三百年記念祭」が開催されております。このように「幕府」がおかれていなくても――あ、そうですね、長岡のほうは、城主・牧野氏が藩主となって「開府」と定義づけております―、私たちの千葉市において、千葉氏が千葉に街を開いたという大治元年を「開府」としたのは、近代に入ってから他の自治体を見れば別におかしなことではないわけです。辞書的な意味に限っては外れることも知れませんが、一連のこうした近代の「地域」の営みの中で、千葉の「開府八百年祭」というのが行われたということが発見されるわけです。一つここで気づくことは、近代においては、他の自治体に比べて後発なのですが、「開府」以来の街の歴史の長さから見れば、「千葉開府」というのは「開府」記念を実施した近代都市の中で―八百年という―、最も遡る開府祭である、と、位置づけられるわけで、このことは記憶していただきたいことでもあります。

【画面7】では、誰が「八百年祭」ということを思いついたか？という話に移ります。今日の後の話でも出てきますが、私が調べた限りでは、加藤久太郎町長の当時です。「八百年記念の着想」と提示画面に書きましたが、配付資料にも掲げましたように「実は千葉氏の年代を繰り、八百年ともなれば、千葉創立一代記念祭を挙行せんと

思ひたる」と、加藤町長時代に「八百年記念」が明確に意識されています。ただ「開府」という言葉は使われておりません。配付資料のその後、これは「房総史談会」という団体が「千葉市街創立八百年記念祭施行並に猪鼻丘神社創設建議書」を出しています。傍線を引いたところ、「千葉市祖宗の勲労を追懐し、市民将来の覚悟を立てんが為、茲に八百年の記念事業を施設せられんことを建議す」と明記しています。つまり、（明治43年に）加藤町長に提案されたものが、大正12年当時まで継承されているわけです。ただ、ここでもまだ「開府」という言葉を使われていないこと、もう一つ、今日の結論の一つになりますが、近代において「千葉氏」の「歴史」を顕彰するという営みの中で一貫しているのが祖宗を追悼するとか、追懐するということ。要するに、この街の開いてくれた千葉氏一族を弔う、という営みになっているのです。「房総史談会」の引用では、特に高望公から宗胤まで「五公」を祭る神社を建立しよう、と具体的な営みが企画されていたということがわかります。

【画面8】この部分をまとめてみますと、やはり「開府」という言



葉は久保三郎市長の文章に初めて見出されるわけです。彼の書いた「序文」(『八百年記念祭誌』)は昭和2年のもので―八百年祭の実施はその前年ですけれども―、「本市開府ノ記念日トシ、千葉市ノ古城址亥鼻台ニ於テ開府八百年記念祭ヲ執行セリ」とあります。この『八百年祭誌』に「開府」という言葉が出てくるので、恐らく前年の記念祭を企画するにあたり―先行した他の自治体の「開府」行事を参照したか、文献的には立証できないのですが―、開催直前になって「開府八百年」という形になったのではないかという経緯が想定されるのです。もう一つ、注目していただきたいことは、線を引いた部分です。この「八百年記念祭」を行うにあたって、当時の久保三郎市長が「後世市民ガ九百年祭一千年祭ヲ挙行セラルル当ニ其ノ理想ト市是トノ実現セラルルナルベキヲ信ズ」と述べていることです。この久保市長にわれわれが託されたことというのは―節目節目に千葉市の「理想」と「市是」は変わってくるのでしょうか―、いずれにしても「市としてあるべき姿」というものを「開府」の区切り区切りで確認していく、こうしたメッセージが後世の私たちに託されている、ということが理解されるわけです。先ほど奇しくも山田先生が九百年祭、千年祭に触れられていましたが、「開府記念」当初がどうだったかということを知るうえで、この部分というのは非常に重要だと思います。以上の話を簡単にまとめますと、「開府」というのは幕府がなかった他の自治体に先行事例があるということ、「八百年記念」という着想は管見の限りにおいては加藤久太郎町長

から受け継がれてきたものであるということ、これらの前提があった「八百年記念祭」を実施するにあたって千葉市が「開府」を冠したという経緯が見えてくるわけです。当時の資料の「序文」などは、形式的な挨拶程度に考えて、結構読み飛ばしてしまうのですが、実はとても重要なことを言っているわけです。そして、いま私たちがこれから開府九百年に向け、再び開府記念事業に関わっていく時に、スタート地点にいた人々が何を意図していたのか知るのには、非常に大切なことだと考えます。いろいろな方に、まさに今日お越しになった皆さんが、例えばお孫さんとかに、大正時代に千葉市が出来たばかりの頃、当時の市長が「開府」についてこのようなことを言っていた、とは是非広げていただきたいわけです。以上は入口なのですが、これから駆け足で江戸時代の末から千葉市ができるまで、どのような「人々」が関わってきたかという問題を駆け足でさせていただきますたいと思います。

三 近世末・明治期の動き

【画面9】お手元の資料と画面が変わります。これは『報告書』にも掲げたのですが、『妙見堂再建寄附帳』の抜粋です。これの実物は板本で、千葉県立図書館にあります。閲覧申し込みをすれば、かなり傷んだものが書庫から出てきます。当時の人々が―当時と言いますのは、今の千葉神社が妙見寺と呼ばれていた当時、安政6年

とありますが、安政6年は西暦ですと一八五九年、もう幕末です。人々というのは、妙見寺の門前の人々が中心となります。妙見堂再建の為の寄附を集めるにあたり、どのような「歴史」を語っていたか、ということを紹介するために挙げたものです。やはり江戸時代の人々にとって、画面に画像として挙げております、この妙見堂に二百石を寄せた徳川家康の寄進状は非常に重要で、徳川幕府に妙見堂は当初から認められたものだという根拠になっているわけです。『寄附帳』に「料田二百石御寄附」とありますが、その後の6行目ぐらいには「台徳院殿是又御信仰御助成被下置依而天下泰平」とありまして、秀忠からも信仰が向けられていたということも加えられています。こうした門前の人々が、徳川幕府当初から我々の妙見堂が將軍から信仰を受けて寄進を受けている、という「歴史」が、幕府の時代を生きた人々にとって保証された存在である証しとなっているわけで、それを必ず書いておくわけです。ちなみに（寄進状の）天正19年というのは西暦で申しますと一五九一年です。その当時から約三百年のちの、妙見堂に集った人々は幕府のお墨つき（保証）のある信仰対象として維持し続けてきたわけです。この「寄進状」では、千葉氏について「大治年中常重遷座以来」と一族と妙見様の起源を当然語っています。また、当時どのくらいの人々が妙見堂に信仰を寄せていたか、という数の問題についても「五千余人心を合せ」と記載しています。江戸時代の末でも、妙見堂に信仰を寄せた人々が相当数あったことが確認できると思います。

【画面10】次は本当に駆け足になりますが、明治に入って千葉市・千葉氏がどうなっていたのかという問題です。この画面では簡条書きにしておりますが、「千葉氏歴代建碑設置運動」というのが明治24年から始まり明治30年まで、最終的に警察署の許可が出るまで5年ちょっとかかっているわけで、その間、碑文の草案とか、義援金の募集とか、いろいろな活動がされています。しかしながら明治24年に企画された碑は、結果的に立っておりません。その後の大きい出来事といたしましては、「千葉氏遺跡保存会」というのが明治35年5月に企画されました。これは大規模な企画でありまして、当時の郡長とか、各町長とか、それから千葉県の著名出身者で構成されています。有名なところでは、歴史学者の白鳥庫吉が挙がっています。これらの動きにつきましては、画面の左側に作田董作という方が—この人新聞記者ですけれども—、『八百年記』で簡単にまとめているので、そこを引用してあります。「明治二十四年に至り、東金町の市東市左衛門、印旛郡八生村小川景寛外二名が発起となり、墳墓修補碑建立を企て、越て同三十年当時の千葉神宮宮司千葉良胤外三名の發起にて、又更に同三十五年千葉町有志によりて、千葉氏遺跡保存会の企てもあったが、何れも只数回の会合を催うし、会則を議決し、役員を選挙したまま何事をも為さずして、煙の如く立消えとなり今日に及んだ」とあります。これらの経緯については『報告書』に考え得ることは書きましたが、結果的に実現しなかったわけです。「日清戦争」とかいろいろ要因はあると考えられますが、今

回は省略させていただきます。

四 明治末の千葉町 ― 加藤久太郎町長の時代

【画面11】次に「明治末の千葉町」ということで「加藤久太郎町長の時代」と副題を付けています。加藤町長の略歴はそこに書いた通りですが、一言で申せばジャーナリスト出身の町長ということになります。いろいろな新聞社を経て、明治39年7月に第六代千葉町長となるも、二期半ばの明治43年6月辞任となります。これは町の会計の不正経理が発覚し、職員の総辞職にまで追いやられるその寸前で、何とかことを収めて自ら辞任したというような、そうした経緯だそうです。この間の仕事を自身の『在職四年間』という本で確認しますと、千葉町の尋常小学校の校舎を継続して建設したということ、それから交通兵旅団の千葉町への招聘があります。現在は「鉄道第一聯隊」と呼んでいるものです。日露戦争後の明治39年に呼称が変わったそうです。いわゆる「軍郷千葉」の基礎を築いたということも良いわけです。この辺りですと千葉公園です。いまでも鉄道聯隊の遺跡ありますし、千葉経済高校の裏側にも軍の史跡が多少残っております。あと加藤町長の著作で、注目していただきたいのは佐倉宗吾のものです。いわゆる印旛村周辺の義民研究です。それから町長辞めた後に『印旛村開拓新論』を成します。千葉町以外の、どちらかというとい印旛村周辺の「歴史」に長く関心があり、著述が残さ

れている点についてはまたあとで触れていきます。

【画面12】この町長が「千葉氏研究会」という組織を発足させます。この画面は「趣意書」で、加藤久太郎の署名がある明治43年3月のものの抜粋です。これを見ますと『千学集抜粹』を引いて「大治元年丙午六月朔日始めて立つとあり」、「七百八十五年前の事にして。即ち第十二世紀前半の昔に属せり」とあります。前半部に書いてありますが、千葉氏のことを知らないことについて、3行目に「豈に愧つべきの限りならずや」と断じています。つまり、千葉に住んでいて千葉の起源を知らないことは恥ずべきことであるということです。かなり壇上断に構えた言葉です。そして、後半部ですが「故に吾人は茲に同志と謀り本会を創設し。一は以て千葉氏の遺績を探究し蒐集し。一は以て此種思想の普及を期せんとす。是れ洵に吾人が古に対するの義務なるべきなり」と述べています。かなり使命感を帯びていて、千葉氏の過去を調べていかなければならない、知らなければいけない、というふう強く言うていくわけです。かなり精神論に近い主張と捉えられましよう。



【画面13】これはなぜかという、時代状況による訳で、画面変わります。ではこの「千葉氏研究会」ができるまでの大雑把な経緯をたどってみます。そこから何が見えてくるか、という問題です。まず第一には「日露戦争」があります。日露戦争の後、「交通兵旅団」を千葉町に招致するという活動が、明治39年8月から始まり、最終的に移転するのが明治41年11月となります。この後「市制調査会」というのを組織し、これが明治42年10月から毎週木曜日に開催されたそうです。その時に、「白鳥健」という人を囑託として調査事務に当たらせました。その後、これが一番重要なのですが「第二回内務省地方改良講習会・同感化救済事業講習会への参加」の部分です。これは文部省を会場に実施されたもので、明治42年10月11日から11月1日まで約20日間、東京に出かけて受講したそうです。千葉県内の自治体の首長が全部参加したわけではなく、県都である千葉町、模範村としてよく知られている源村、県中央部の村です。こうした首長が集められた地方改良の講習会に参加した直後「自治研究会」を立ち上げています。

【画面14】こうした前段階があつて「千葉氏研究会」が始められるわけです。皆さんにお配りしていない画面ですが、「地方改良運動」が当時行われていました。現代は「地方創生」という時代ですけれども、当時の「地方改良」を加速させたのが「戊申詔書」の存在です。結局何なの、ということに答えれば、日露戦争後の地方社会、そのしわ寄せを受けて国が疲弊・荒廃し、町村財政も破綻に瀕してお

りました。非常に地方が疲弊しているところに「では地方から盛り上げていけば」ということでして、いつの時代も繰り返します。ニュースで国の借金がまた一千兆円を超えたなどという報道を耳にしますが、「地方」を改良していくことによって、国力を取り戻そうという目的なわけです。画面後ろの3行には「また同時に、町村を支える地方社会の改良にも目が向けられたほか、国民に対するさまざまな教化策も推し進められた」とあり、要するに先ほど「感化講習会」も同事に行われたとありましたように、地域の人々の思想的な教育もし直すのだ、ということ、各地でいろいろなかたちで実行されたのだと思います。千葉町の場合、この講習会に出た直後に「千葉氏研究会」というのを立ち上げて、先ほどの「趣意書」から読み取れましたように、精神的な側面、千葉に住むのであれば千葉氏の過去を知らないのは駄目だ、恥ずべきことだ、知ることが義務である、というように、「上から」すすめられた政策として「千葉氏研究会」が立ち上げられた、ということが言えるかと思います。画面に矢印で書きましたように、各地で明治末年から大正にかけて「郷土史」というものが編纂されますが、「地方改良運動」に伴って加速していくというのが一般的な理解であります。いずれにしても「地方改良運動」の中で、千葉町の「千葉氏研究会」が発足したということ是指摘しておきたいと思っています。

【画面15】次に、先ほどの「市制調査会」の調査事務囑託にあたった白鳥健という人に触れておきます。この人は歴史学のほうでは

ほとんど知られていないようですが、初期社会主義研究の中では千葉県内で有名な人物で、山武郡の福岡村―東金と大網白里の一部になっていますが―出身で、中央大学を卒業した後、成田鉄道会社に入社し、先ほどの加藤久太郎と同様、新聞ジャーナリズムに進みます。そのあと明治38年12月に千葉県の衆議院議員補欠選挙に「北総平民倶楽部」の後押しによって社会主義者として出馬します。落選してしまっただけで、明治41年4月以降は社会主義とは距離をおき、『経済新聞』を創刊しています。「市制調査会」書記に従事しながら、その後は郷土史への関心を示し、『千葉誌』『復興の房州』などを著します。『復興の房州』は関東大震災後の北条町―今の館山市で、館山で一番被害が酷かったことはご存じの方も多いと思います―、その被災地にすぐ入って被害状況などを調べるわけですが、同時に源頼朝の足跡に関わる史跡などを調査しています。それから『佐倉宗吾傳』『義民叢書 佐倉宗吾』を著すわけで、おそらく加藤久太郎町長とは「佐倉宗吾研究」という歴史的関心が共有されていたと考えられます。過去の公開市民講座でも紹介しましたが、その後『源頼朝と房州』を著しますが、大森金五郎という、当時の中世史研究・武士研究では第一人者の千葉県出身者で、中央史壇の中では重鎮にあたる人物が立ち上げた「頼朝会」の創立初期を支えていたようです。画面の人物写真は、皆さんにお配りした別紙「略年表」に書いてある、宗吾霊堂で写されたものです。ひとときわ背の低い眼鏡の髭の人物が白鳥健です。ものの本によっては白鳥健（しらとり・けん）と読ま

れていますが、自著の本人署名に平仮名で「たけし」書かれていますので、私は「しらとりたけし」と呼んでおります。

【画面16】それから―本日の話には直接関係ありませんが―、白鳥健と郷土史研究でつながっていた吉田璣（よしだ・たまき）という人についても触れておきます。昨年発表した『報告書』では、吉田璣の著書のほとんどを―著作権の期限が切れておりますので―活字に起こし直しておりますが、個人の研究として「千葉氏研究」―千葉氏について一書をまとめた―を果たしたのは、近代ではこの人が最初になるわけです。それが、以下の二冊の本で、まず『千葉氏』房総史研究1で明治40年に、それから『千葉盛衰記』が、大正3年に刊行されています。この吉田璣がなぜか先ほどの紹介した明治24年からの「建碑運動」の資料とか「千葉氏遺跡保存会」の記録文書を、この二冊の本に転載しているのです。彼がどういうルートでこれらの資料を入手したかについては、画面の最後に示した、社会主義運動のなかでの白鳥健との出会いが契機となり―資料的には交流の継続は確認できませんが―、白鳥健によって吉田璣に提供されたと考えられます。この人の略歴は画面に示している通りですが、下の画像の「北総平民倶楽部」、これは田中正造揮毫によるもので、宗吾霊堂の宝物館に今でもあったと思います。吉田は田中正造と接点があり、白鳥は宗吾霊堂と繋がっていました。それから吉田がこの二冊の本を書いたのは、出身村である吉田村―当初は地主であったのですが没落しています―に戻ってきてからのことです。当時の



社会主義排斥・厳しい取り締まりの中で、彼がかなり身の危険を感じながら——常に警察に尾行されていたということです——、そこから逃れるかのように千葉氏の研究に没頭していった、ということがあるそうです。吉田璣が残した資料がなければ、今日の私の話も恐らく半分ぐらいしかできなかったでしょう。イデオロギーの問題は措くとして、後代に残してくれた「記録」というのは、やはり貴重なもので、大変感謝しているわけです。

【画面17】再び、加藤久太郎町長の右腕であった白鳥健に戻りますが、彼が「千葉」という町をどのように見ていたかという問題を見ていきます。画面は『千葉誌』という、千葉町の歴史をまとめた明治44年に刊行された自治体史の末部のところに書かれていることです。現代でも続く問題——千葉に文化文化資源が少ない——という点に言及されています。目を引くような古い文化財がないという問題ですが、「この頃の千葉には千葉特有のものとは、甚だ少なく」とあります。但し、あるものは「鎌倉の時代精神たる勤儉尚武の気質」を挙げています。先ほど地方改良運動や感化教育の話をしました、

白鳥健も精神性に訴えているわけです。後半部分では「忠孝節義勇武廉恥等精神的遺物なることもまた、当然のことなるべし」と述べて、最後の3行目には「民の膏血を絞りて」——要するに税金を搾り取って——、「金殿玉樓を営むが如きは、鎌倉主義の禁物なり。これと同じく常胤の居城たる千葉に伝うべき建築彫刻等の少なきもまた、当然の理なり」——要するに儉約している鎌倉武士の精神性の中で、民から税を吸い上げて立派な建物を建てるようなことは当然しないのだ——と述べています。この核となるのが、「鎌倉の時代精神」となりましょう。彼が千葉の町に見いだしたのは千葉氏による「鎌倉の時代精神」であつたわけです。以上で、千葉町において加藤久太郎町長とそれを補佐した白鳥健という人によって、千葉の町と千葉氏の「歴史」が結び付けられた経緯を簡単にまとめますと、千葉町の当時においては、町は繁栄の途上にあり（日露戦争後の国家的疲弊も手伝って）、千葉氏が千葉の街を開いたあの当時を目指そうという、そうした千葉氏の「歴史」——繁栄した過去——に学ぶこと、結果的には「地方改良運動」の中で「学ばなければいけない」という姿勢で千葉氏と向き合っていたわけです。

五 市制施行と開府八百年祭

【画面18】千葉市になりますと、（次の画面）「市制を迎えた「千葉」の認識」というところです。画面左側の肖像写真の人物は神田清司

初代市長ですが、年度替わりで臨時市長を務めた後に正式に初代市長になりましたので、このあたり私の資料にミスがありますのでご修正ください。画面は神田市長の市制施行当時の式辞で、「千葉は海陸継承の地在昔豪族千葉氏の築きて威武を耀せし所」として、一行飛ばしまして「後千葉氏の凋落と共に衰頹し、纔かに瀬海佃漁の一寒村として存するに過ぎず」と、認識しています。注目したいのは、千葉氏が凋落する、要するに氏族として力を失うと同時に千葉の街も一寒村にまで落ちぶれたという、そうした街の衰退というものも一緒に見ているわけなのです。ただし、その後明治になり、「聖代文明の恵沢は永く此の枢要の地寂寥し了せしめず」として、こんな寂しい土地のままで、明治の聖代・近代の社会は収まらなかったのだとすると翻します。その後、千葉町以降の発展を述べて、最後の部分ですが、「千葉氏当時の殷賑を凌駕するに至らん」と結びます。もう既に千葉市となった千葉の街は、『千学集抜粹』に伝えられた千葉氏が開いた当時の―あれは「白髪三千丈」でしょうが―、あの賑わいを凌駕するに至った、と認識しているわけなのです。

【画面19】千葉の繁栄については、皆さんにはお配りしておりますが―国会図書館のデジタルコレクションで閲覧できます―、『千葉開府八百年記念、数字上より見たる千葉市の変遷』という小冊子のデータがあります。画面は文字が小さいので会場の皆さんからは見えませんが。まず人口なのですが、明治22年に二万一千人ぐらいです。それが大正14年―八百年祭の前年に当たりますが―、

四万一千人となって人口は（この間）倍です。それから―会場には市の職員の方もみえているので、税収がこんなに上がったら良いなと思われるかもしれませんが―、大正3年からの数字しかありませんけれども、（一戸あたり）九万三千九百五十二円から、大正15年には三十六万六千円と、約4倍になっています。千葉市の財政一つ取りあげても、人口にしても、非常に発展しています。神田市長の言っていることは大袈裟な話ではない、ということが理解されると思います。

【画面20】そのあとの「開府八百年祭」です。先ほど、久保三郎市長による『八百年祭誌「序文」』を先取りして見ましたが、画面は同書の「趣旨」のところですね。なぜ八百年祭をやるのか、という問題で、重要だと思われる部分について取りあげてみます。4行目のところですが「その源を尋ねれば、千葉氏四百年の恩恵は決して忘却する能わざる処なり」とありまして、千葉氏による「恩恵」は忘れてはならないものだということ、これは千葉町当時から変わらないところですね。そして、画面真中あたり、「千葉氏累代の位霊を慰むると共に、市の紹介と市将来の発展に資せむかため記念祭に併せて諸種の催事を行ふ」とあります。やはり将来に託した記念事業だということ、これは「序文」の繰り返しで、八百年祭の柱になっていると言えるでしょう。それからあと「慰霊」です。千葉氏一族の慰霊をこの機会に実施するということです。それからもう一点注目していただきたいのが、後ろから6行目ぐらいの部分です。この八百年祭は市が

中心になって実施しているように見えるのですが、一方で住民・市民・有力者等の協力が欠かせなかったわけです。「市の協賛会が多大な犠牲を払い、以て本計画を援助せられたる。またその他公私設団体並に有志諸氏が多大の期待を以て助力せられたる」という「協賛会」への謝辞から理解されるところです。現代から直近の「八百五十年祭」、昭和の開府記念事業を調べてみますと、これは八百年祭よりもより市民の協力が大きかったようで、当初「八百五十年祭」の企画自体が千葉市主導で始まったわけではなく、住民団体から声上がり、その窓口として本日後援いただいている千葉日報社が代表になり、市と県に「八百五十年祭」の実行を持ちかけた形になっているのです。

【画面21】「八百年祭」では当時の「協賛会」が記念事業として出版した文献として、画面に出ております『千葉大系図』があります。この画面は—皆さんに資料としてお配りしていない画面です—、『千葉大系図』の「緒言」のところで、傍線を引いた部分に何が書いてあるかと言いますと「ここに千葉氏祖宗の英霊を慰め、かつその史跡に鑑みんと欲し」とあります。やはり「慰霊祭」なのです。千葉氏の慰霊祭というのは、近代になってから継続して志されていることです。次の傍線部では「千葉神社に奉告祭を上げ、翌二日を以て大日寺に慰霊祭を行ひ」とあります。現代社会が信仰とか、失われた一族に対する慰霊とか、こういったものにあまり気を向けないというのは仕方がない傾向とは思いますが、このことは明治(近代)以前か

ら、最初に部分で触れた妙見寺・妙見堂再建の寄附帳からも窺えたことで、やはり氏族に対する敬意というか、畏怖の念というか、そういうものが一貫して地域の人々に共有され、行事としての「慰霊」が望まれたのだということだと考えます。

六 千葉氏をよりどころとした人々

【画面22】「千葉氏をよりどころとした人々」ということで、具体的には先ほどもでの加藤町長とか白鳥健とか、それから市制施行・開府八百年祭当時の市長以外に—むしろ今後はこの人々に注目したいのですが—、まず前の画面に挙げております紅谷四郎平(べにたに・しろうへい)という—ご存じの方もいらっしゃるかと思います—が—人物に注目したいと思います。この人の名前を追っていきますと、ふとしたことに気付きます。一つは(幕末とはいえ江戸時代の)『妙見堂再建寄附帳』に紅谷四郎平の名前が(寄附者の中に)載っているのです。そして(大正15年の)八百年祭の記念協賛会の会長として紅谷四郎平の名前が載っているのです。これということか考えて、この人長生きだな、というのでは、少々おかしい話になってしまいます。画面上の「略歴」に掲げていますが、この人自身は明治24年に紅谷家の養子になっているわけで、『寄附帳』の人物とは別人です。つまり、先代の紅谷四郎平が妙見堂に集う寄附の中心人物としていたわけで、その養子が養父の名をそのまま継いで



紅谷四郎平を名乗るとともに、先代が行ってきた千葉氏関係のいろんな活動に協力を継続していったということがわかるわけです。（今日の話では）まず最初に「遺跡保存会」の発起人中に名前が出てまいります。そして同会の評議員・幹事に選出されています。それから「千葉公民会」が、明治39年に加藤久太郎町長を会長として組織され、その副会長に紅谷四郎平が就任しています。それから、これはとても有名な話ですが、例の「交通兵旅団」に土地を提供しており、その敷地は一万五千坪分でした。一万五千坪とは東京ドーム一つ分という広さに当たりますが、それを無償で寄付しました。また千葉町の「市制調査会」では、常任委員に選任されております。さ

らに「八百年祭」では、大正15年の開催当時、67歳で「協賛会長」を務めています。その時、個人で寄付したのが―当時の寄付の記録を見ますと―、三百円で、個人では第四位の額でした。それから自らが頭取を務める千葉割引銀行からも二百円寄附しています。（伝記を見てみますと）この人物は財産を残さなかったことで有名で、千葉の街や人々のために、すべて使い尽したと

いうことです。それから「略歴」の3行目のところですが、日露戦争に従軍した後、明治33年に「千葉割引銀行」という、千葉町に根ざした銀行を創業しています。明治39年には「千葉電灯株式会社」を創業し、明治41年には「劇場衆楽館」を開きます。これは火事で焼けてしまうわけですが、その後も町会議員等を務め、千葉の町の繁栄に多大な功績を残し、71歳で亡くなっております。このような千葉生まれの根っからの千葉っ子というわけではなく―県内ではあります―、外から養子に来て―父の遺志であったか、家の意志であったかわかりませんが―、千葉町の住民として、街の繁栄のためにいろいろな角度から尽した人でありました。そして近代の「千葉氏をよりどころした人々」の中で最もその名が多く登場する人物でもありました。

【画面23】それからもう一人、紹介しますと、武本為訓（たけもと・いくん）。「タメノリ」と読むこともあるらしいのですが、正確なところはわかりません。この人物は、加藤町長の「千葉氏研究会」準備会の創立メンバー四人のうちの一人です。ご存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、この方の本業は医師でありまして、伝染病の権威として有名です。明治35年に寒川に浩生医院を開業して、明治41年に吾妻町に移転します。昭和32年12月登戸町で亡くなりました。「千葉氏研究会」の後のことですが、県議会議員を務め、それから『印旛沼開鑿記』という本を刊行しています。ここで思い出していただきたいのですが、印旛沼の開拓に関する書は加藤久太郎も町長辞め

た後に刊行していました。「印旛沼の干拓事業」というものが、近代千葉の人間にとって、かなり重要なものであったことがうかがわれます。(県会議員の後)千葉市の第一回市議会議員に当選します。さらにその後、千葉信用組合の初代組合長になります。お医者さんですが、多彩な経歴です。「八百年祭」では、紅谷四郎平を支える形で、「協賛会」の副会長を務めていました。そして、この人物も—先ほどわざと「略歴」を読み飛ばしたのですが—、千葉町に生まれた人ではないのです。出身は市原郡高滝村—高滝ダムがあつて、毎年花火大会が催されているところ—、千葉の南の生まれで千葉の町に定着された、そういう方で、紅谷四郎平同様、「千葉氏をよりどころとした人々」の中に挙げるべき一人であると考えます。

◎まとめと展望

【画面24】まとめてみますと—皆さんにはお配りしていない最初の画面なので、前を見てください—、近世末から明治前半期まで、最初に見た妙見寺門前の人々とその周辺では、〈信仰〉というところで結束するわけですが、たぶん心情的には、〈千葉氏〉(千葉一族)という存在を、人々は意識していたと思いますが、妙見さんに集う人々の姿を確認しました。その後、千葉県の成立と県都・千葉町の存在、そういった国家として、かたちがどんどん固まってきたなかで、千葉氏の顕彰と追悼というのが、画面※印に書きま

ように、回顧可能になっていく。そういった社会状況になっていくわけです。そのなかで、実現はしませんでした、「歴代建碑設立運動」とか「遺跡保存会」ができてくるわけです。それで、明治末から大正末までの期間—これは非常にわかりやすいのですが—、千葉町は(千葉氏当時の)繁栄を志して、町民の精神性に問いかける、そういったかたちで千葉氏の過去を探究していきました。一方、千葉市は、先ほどの神田市長の「千葉氏当時の殷賑を凌駕」という言葉にあったように、千葉市が成立・達成を果たし、市の将来の発展に役立つ営みとして、「千葉氏」の〈歴史〉というものを捉え直していると言えます。いずれにしても、千葉の街を開いてくれた一族に対する心情的なところで—われわれが考える以上に—非常に身近な存在として認識されていたと思われます。(テーマとして掲げた「よりどころにした人々」については、千葉町に移り住み、千葉の街の人々とともに地域に繁栄を望んだ有力者の一部を挙げてみました。(こうした人々以外で)有名な方では、郷土史家の和田茂右衛門(わだ・もえもん)氏が、われわれがよく知っているとこです。和田氏も(紅谷四郎平氏同様)先代から名前をおそらく引き継いでいて、同じ和田茂右衛門という人が、ずっと諸資料に出てきます。こうした地域のひとともに、『八百年祭誌』に「主唱者たるや市の名譽職始め、名望家・有力者」とあったような人々—外から来て千葉に定着した人々—が、「開府」事業に協力してくれたということなのです。非常に駆け足で見てきたわけですが、以上のようにまとめられるかと思

います。時間になってしまいましたので、ここで切らせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

【画面1】



平成30年度 千葉市・千葉大学公開市民講座

千葉氏とアイデンティティ

— 軍記物語の語るもの、近代の人々のいとなみ —

「千葉氏」をよりどころとした人々の〈歴史〉
— 「千葉町」から「千葉市」へ —

久保 勇（千葉大学大学院人文科学研究院）



『新世紀・市制施行80周年記念 写真集 千葉市のあゆみ 郷土が見える・わかる・語れる』2001

【画面2】

「千葉氏」をよりどころとした人々の〈歴史〉— 「千葉町」から「千葉市」へ— （久保 勇）

【開講案内】より

現在、千葉開府九〇〇年に向けて、千葉市ではさまざまな取り組みがされています。開府記念事業は、市制施行（一九二一）の五年後にあたる「千葉開府八百年祭」（一九二六）から始まり、昭和五十一年（一九七六）の「千葉開府八五〇年式典」へと受け継がれてきました。本講座では、近代に入って千葉の人々がどのように「千葉氏」をよりどころにしてきたのか、明治の千葉町の当時から千葉市の八百年祭に至るまでを射程に、その〈歴史〉を考えていきます。

【構成】

- 一、問題の所在 ↳ これまでの研究から
- 二、近代から千葉と千葉氏を考える
↳ 「開府」をめぐる
- 三、近世末・明治期の動き
- 四、明治末の千葉町
↳ 加藤久太郎町長の時代
- 五、市制施行と開府八百年祭
- 六、千葉氏をよりどころとした人々

【画面3】

「千葉氏」をよりどころとした人々の《歴史》—「千葉町」から「千葉市」へ—（久保 勇）

一、問題の所在 〓これまでの研究から

平成29年度 千葉市大学等共同研究事業

「千葉氏」と市民に関する研究

―近現代の「千葉氏」の受容をめぐる―

（千葉大学・千葉市総合政策局政策調整課都市アイデンティティ推進室）

【目標】

（1）「人々が千葉氏を受けとめた歴史」にかかる基礎的資料を収集・整理することにより、「千葉氏」にかかる魅力あるコンテンツを整備すること。

（2）これらの資料収集整備に大学生を中心とした次世代の市民が関わることにより、若い人々が魅力ある「千葉市らしさ」をプロデュースしていく基盤を形成すること。



↑ 市立図書館・公民館図書室等に配架。
千葉市HP「共同研究事業」に概要版が掲載

【画面4】

「千葉氏」をよりどころとした人々の《歴史》—「千葉町」から「千葉市」へ—（久保 勇）

一、問題の所在 〓これまでの研究から

〈講座〉

平成24年度 千葉大学公開市民講座

（二〇一二年一月一日）

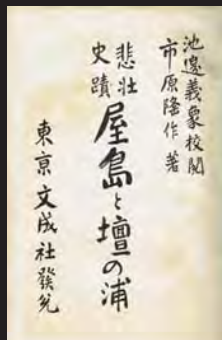
戦いの「記憶」と房総―近代からの視線―

〈科研費研究〉

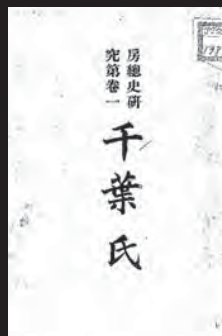
基盤研究（C）・明治期の〈知〉とメディア
言説を通してみた軍記文学の文化的展開に関する基礎的研究（二〇一三～一六）

挑戦的萌芽・近代「地域」の記述と『平家物語』の「記憶」をめぐる研究―史蹟紀行・郷土史を対象に（二〇一六～一七）

基盤研究（C）・近代「地域」の記述と軍記物語の享受をめぐる総合的研究―郷土史・平家伝説を対象に―（二〇一八～二〇）



明治44(1911)



明治44(1911)

【画面5】

「千葉氏」をよりどころとした人々の〈歴史〉—「千葉町」から「千葉市」へ— (久保 勇)

二、近代から千葉と千葉氏を考える
「開府」をめぐる

『千葉開府八百五十年記念誌』 (千葉市、一九七七)

(昭和五十一年五月二十三日・読売新聞)



「知ろう 愛そう つくろ う 郷土愛」をテーマに「千葉開府八百五十年祭」が行われる。五月二十日付の「ちば市政だより」は、六月一日に行われる

「記念式典」を中心に、記念行事を大きく紹介している。

開 府

「開府」とは、「広辞苑」によれば、「幕府を開くこと。特に、江戸に幕府がおかれ、江戸の町が開かれたこという」とある。千葉氏の歴史をたどると、この「開府」にあたるような史実があるのだ

ろうか。「千葉市史」によれば、大治元年(一二二〇)、平氏の流れをくむ千葉常重が、現在の千葉市多摩に館をかた(城を形とった今の郷土館とは異なる)を築き、その周辺に次第に街道並みが整い、続く常胤の時代には、下総の国の「都」として、かなりの隆盛を見せたと記されている。さ

残っていない。

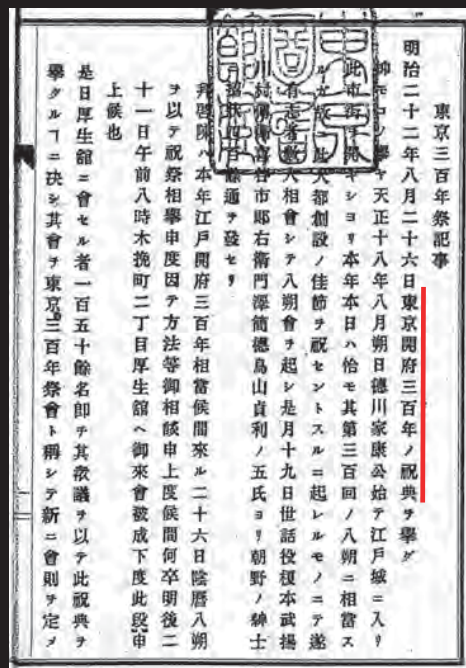
八百五十年前に、現在の千葉市の「基盤」ができたといえども、「開府」とは、千葉が過ぎるのではない。千葉氏の滅亡で、千葉は途絶え、その後は、半農半漁の寒村にすぎなかった。

「記念行事をみると、「パレード」や「民謡大会」「中元大売り出し」などと、「開府」とは無関係な「催し」ばかり。わずかに、郷土館で特別展が開かれるだけだ。「これをきっかけに千葉の歴史を見直し、郷土愛を育てたい」(市企画調整局)というねらいは結構だが、いったい、こんな安易な行事を繰り返す「官製」のお祭り騒ぎから、郷土愛などが生まれてくるのだろうか。疑問を抱く人も多いのではないか。(よ

【画面6】

「千葉氏」をよりどころとした人々の〈歴史〉—「千葉町」から「千葉市」へ— (久保 勇)

二、近代から千葉と千葉氏を考える
「東京三百年記念祭」
明治22年(1889) 8月26日



「名古屋開府三百年祭」名古屋城築城ほか
明治43年(1910)
↓開府四〇〇年記念祭(2010)

「長岡開府三百年祭記念会」城主・牧野氏
大正6年(1917) 5月
↓開府四〇〇年記念事業(2018年)

※近代においては後発だが、最も遡る「千葉開府」記念(大正15年≡開府八〇〇年)

【画面7】

「千葉氏」をよりどころとした人々の《歴史》—「千葉町」から「千葉市」へ—（久保 勇）

二、近代から千葉と千葉氏を考える

●八〇〇年記念の着想

加藤久太郎町長（明治43年4月）

「実は千葉氏の年代を繰り八百年ともなれば
千葉創立一代記念祭を挙行せんと思ひたる」

（『東海新聞』六六一八号）

「千葉市街創立八百年記念祭施行並に猪鼻丘神社創設
建議書」房総史談会（大正12年5月）

千葉市街の創立は大治元年（紀元1786年）にして、
正に大正十四年を以て八百年に達す。依りて千葉市祖
宗の勲勞を追懷し、市民將來の覺悟を立てんが為め、
茲に八百年の記念事業を施設せられんことを建議す。

《中略》來たる大正十四年を以て千葉市街創立八百年
記念祭を施行し、猪鼻城趾に千葉氏の勲功顯著なる、
高望・常将・常重・常胤・宗胤、五公を祀る猪鼻丘神
社を創設して市民並びに県民崇敬の中心の一たらしめ、
かつ猪鼻公園を拡張して運動場競技場 公会堂、圖書
館等の設備を有する大公園とせられんことを建議す。

※八百年の記念事業は明治末に着想。

【画面8】

「千葉氏」をよりどころとした人々の《歴史》—「千葉町」から「千葉市」へ—（久保 勇）

二、近代から千葉と千葉氏を考える

●「開府」八〇〇年祭へ

久保三郎市長（昭和2年6月）

大正十五年六月一日本市開府ノ記念日トシ、
千葉氏ノ古城趾亥鼻台ニ於テ開府八百年記念
祭ヲ執行セリ。

《中略》

此ノ書ハ開府八百年記念祭ニ当リ、市民ノ熱
誠ヲ披瀝セル実状ヲ述ベタルモノニシテ、本
市將來ノ發展ヲ期セン為、後日ノ参案ニ供セ
ムトスルニ在リ。而シテ後世市民ガ九百年祭
一千年祭ヲ挙行セラル、当ニ其ノ理想ト市
是トノ實現セラル、時ナルベキヲ信ズ。

（『八百年祭誌』「序文」）

◀「開府」事業の先例

↓東京、名古屋、長岡

◀「千葉創立八百年」の構想

↓明治43年（1910）〜大正12年（1923）

◀千葉市による「開府八百年記念祭」

↓後世の千葉市民に託された開府記念祭



第2代千葉市長・久保三郎

【画面9】

「千葉氏」をよりどころとした人々の《歴史》—「千葉町」から「千葉市」へ—（久保 勇）

三、近世末・明治期の動き
●幕府の保証した「妙見」と信仰した人々

「妙見堂再建寄附帳」
（『千葉市史 史料編2』同編纂委員会、1977）

天正末年 東照大神君当国御巡行の節妙見堂へ渡御被為成祭祀の料田二百石御寄附 御判物被下置御太刀一腰御奉納当院ハ 人皇六十六代 一条帝の勅願所中興開山覚算大僧正江 倫命あつて北斗山金剛授寺尊光院と称せられしをまた妙見寺と靈名の号を拝す 台徳院殿是又御信仰御助成被下置依而天下泰平御武運長久の御祈禱長日三時所令勸行也諸侯方始武家其外信仰且奉納物の次第挙てかそひかたし大治年中常重遷座以来（中略）
去る巳年より追々五千余人心を合せ又去年の秋世上一体の怪病流行の折も是又利益のため無難に遁れ候とて続て千葉郷氏子心を催し一同して助成より今般弥本堂再建の基となりぬ（下略）
安政六己未年四月



妙見堂への寄進状（天正19年11月・埼玉県文書館）

【画面10】

「千葉氏」をよりどころとした人々の《歴史》—「千葉町」から「千葉市」へ—（久保 勇）

三、近世末・明治期の動き

●「千葉氏歴代建碑」設置運動

明治24年（1891）

明治30年（1897）

明治24年（1891）8月

千葉家歴代記念碑建碑の義捐金募集開始

明治26年（1893）9月

「千葉氏介公世家碑文」（藤良同）なる

明治30年（1897）11月

千葉家歴代記念碑建碑の許可

●「千葉氏遺跡保存会」の設立

明治35年（1902）5月

作田董作『千葉八百年紀』新居総新聞社、大正15年
明治二十四年に至り、東金町の市東市左衛門、印旛郡八生村の小川景寛外二名が発起となり、墳墓修補碑建立を企て、越て同三十年当時の千葉神社宮司千葉良胤外三名の発起にて、又更に同三十五年千葉町有志によりて、千葉氏遺跡保存会の企てもあったが、何れも只数回の会合を催うし、会則を議決し、役員を選挙したまゝ、何事をも為さずして、煙の如く立消えとなり今日に及んだものであった。

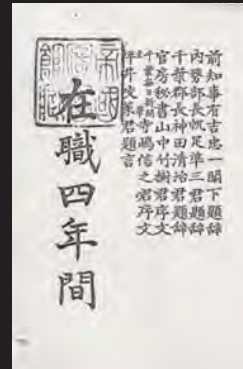
【画面11】

「千葉氏」をよりどころとした人々の《歴史》—「千葉町」から「千葉市」へ—（久保 勇）

四、明治末の千葉町

～加藤久太郎町長の時代

●加藤久太郎（一八六〇～一九二〇）



明治期のジャーナリスト、政治家。市原郡八幡町に生まれ。江湖新聞社、立憲自由新聞、民権新聞を経て、東海新聞社社長（明治27年）となる。明治39年7月に第六代千葉町長となるも二期半ばの明治43年6月に辞任。任期中、第一・第三・第四尋常小学校の校舎新築事業に成功、さらに千葉交通兵旅団設置等を千葉町に斡旋した。

著作に『民権操志佐倉宗吾外五氏伝』（明治26年）、『在職四年間』（明治44年）、『千葉市制論』（大正5年）、『印旛沼開拓新論』（大正9年）がある。

【画面12】

「千葉氏」をよりどころとした人々の《歴史》—「千葉町」から「千葉市」へ—（久保 勇）

四、明治末の千葉町

～加藤久太郎町長の時代

●千葉氏研究会の発足（「趣意書」より）

千葉町に住して千葉の起原、及び千葉氏の事跡を知らざるは、恰かも一族にして其祖先及び家風を知らざる如く。豈に愧つべきの限りならずや。案ふに我が千葉町に千葉民が初めて上総の大権より移転し来れるに創まれるにて。妙見社記録。千葉集。千葉大系圖。下総國舊事考等の記する所に依れば。大治元年丙午六月朔日千葉始めて立つとあり。されば其の起原は今明治四十三年を去る。実に七百八十五年前の事にして。即ち第十二世紀前半の昔に属せり。《中略》斯の如くにして千葉氏当年の盛事は日に埋滅し去り。往事杳として復た尋ぬるに由なからんとす。嗚呼是れ何の為ぞ嗚呼是れ何の故ぞ。思ふに是れ今人が古人を貴び。其の偉績を敬するの思想乏しきの致す所ならんか。故に吾人は茲に同志と謀り本会を創設し。一は以て千葉氏の遺蹟を探究し蒐集し。一は以て此種思想の普及を期せんとす。是れ洵に吾人が古に對するの義務なるべきなり。同感の士希くは奮て来り会せよ。

明治四十三年三月二十一日 発起者 加藤久太郎

【画面13】

「千葉氏」をよりどころとした人々の〈歴史〉—「千葉町」から「千葉市」へ—（久保 勇）

四、明治末の千葉町

→ 加藤久太郎町長の時代

● 「千葉氏研究会」に至る経緯

日露戦争

明治37～38年（1904～05）

交通兵旅団の千葉町招致

明治39年8月～明治41年11月

（津田沼から移転・鉄道第一聯隊）

→



市制調査会

明治42年10月～明治43年3月（毎週木曜）

↓ 白鳥健嘱託（調査事務）

第二回内務省地方改良講習会・同感化救済事業講習会への参加

明治42年10月11日～11月1日

自治研究会

明治42年11月～（第二土曜）

千葉氏研究会

明治43年4月～（第一土曜）

↓ 『千葉誌』明治44年5月刊行

← 地方改良運動

【画面14】

「千葉氏」をよりどころとした人々の〈歴史〉—「千葉町」から「千葉市」へ—（久保 勇）

四、明治末の千葉町

→ 加藤久太郎町長の時代

【参考】地方改良運動

日露戦争後、荒廃した地方社会と市町村などの地方団体の改良を目的に行われた官製運動。とくに第二次桂（かつら）太郎内閣のもとで、**戊申詔書**の渙発（1908年10月13日）を契機に本格化し、内務省などによって推進された。日本は日露戦争の結果、**帝国主義国**として列強と並ぶ国際的地位を得たが、**戦後の地方社会は、その矛盾のしわ寄せを受けて疲弊、荒廃し、町村財政も破綻に瀕していた**。地方改良運動はそうした状態への対応であり、直接的には国家の基礎としての地方団体（地方自治体）を、**帝国主義国家としての日本を支えるに足るものとする**ことを目指した。その重点は、町村財政の整備、町村基本財産の造成、優良吏員の養成などに置かれ、具体的には、**税の滞納の整理、部落有林野の統合などが行われた**。また同時に、町村を支える地方社会の改良にも目が向けられたほか、国民に対するさまざまな教化策も推し進められた。（岡田洋司氏執筆『日本大百科全書』小学館）

↓ 近代「郷土史」編纂活動もこの運動から加速。

【画面15】

「千葉氏」をよりどころとした人々の《歴史》—「千葉町」から「千葉市」へ—（久保 勇）

四、明治末の千葉町

～加藤久太郎町長の時代

●白鳥健（しらとりたけし）

千葉県山武郡福岡村（現在の東金市・大網白里市の一部）生まれ。東京法学院（中央大学の前身）卒業後、成田鉄道会社に入社、その後『千葉毎日新聞』及び『東海新聞』の主筆。明治38年12月の千葉県・衆議院議員補欠選挙に、北総平民倶楽部の後押しにより社会主義者として立候補したが落選。明治41年4月以降は社会主義とは距離をおき、『経済新聞』を創刊、千葉県市制調査書記に従事しながら、その後は郷土史への関心を示し、『千葉誌』（1911）、『復興の房州』（1924）

『佐倉宗吾傳』（1925）『義民叢書 佐倉宗吾』（1931）『源頼朝と房州』（1931）等、多くの著書を発表している。

↓初期社会主義者の郷土史研究



前列（左より）幸田長三郎氏、頭山滿義、坪井金太郎氏、後列（左より）曾根虎之助氏、久保勇氏、白鳥健、頭山翁全忠、藤本曾朗氏、井上龜六氏、大塚清氏

月桂翁の前身の山翁

【画面16】

「千葉氏」をよりどころとした人々の《歴史》—「千葉町」から「千葉市」へ—（久保 勇）

四、明治末の千葉町

～加藤久太郎町長の時代

●吉田璣の「千葉氏」研究

『千葉氏』（房総史研究）北拓社、明治44年
『房総史研究二 千葉盛衰記』北拓社、大正3年

↓近代の千葉氏研究の経緯を知るに右二書は不可欠。

吉田璣（たまき、1882～1917）香取郡吉田村（現匝瑳市）生まれ。早稲田大学卒。在学時の明治36年から社会主義運動に加わる。千葉県において1904～05年は、社会主義のオルガナイザー的役割を果たす。北総青年社会主義研究会・北総平民倶楽部での演説、短期間ではあったが、千葉町の羽衣会という社会主義研究会の創立者となる。白鳥健とこのころ出会う。



田中正造が結成した北総平民倶楽部の写真

「千葉氏」をよりどころとした人々の〈歴史〉—「千葉町」から「千葉市」へ—（久保 勇）

四、明治末の千葉町

～加藤久太郎町長の時代

●白鳥健の「千葉」観（『千葉誌』より）

殊に常胤の代に至りては、源頼朝幕府を鎌倉に開き、鎌倉の勢威は、有形無形なる社会各般のことに及びたるのみならず、常胤は実に鎌倉幕府の一部の創立者にてあれば、千葉と鎌倉とは、恰もまた頼朝と常胤との関係に於けりが如く極めて密接なりき。さればこの頃の千葉には、千葉特有のものとは、甚だ少なく、大抵は鎌倉と同様のものが多かりき。（常胤が鎌倉の邸は今の御用邸に在りき）例えば、鎌倉の時代精神たる勤儉尚武の気質の如きも、頼朝がこれを勧奨したるは勿論なれど、その頼朝をしてこれを勧奨せしめたるものは、千葉介常胤にあらずや。常胤は実に性来の勤儉家なり。後世の所謂武士道の開拓者なりしなり。従つて鎌倉が歴史上に誇りとすべきは、有形なる、建築物や彫刻物を遺せしにあらずして、忠孝節義勇武廉恥等の精神的遺物なることもまた、当然のことなるべし。

〔中略〕民の膏血を絞りて金殿玉樓を営むが如きは、鎌倉主義の禁物なり。これと同じく常胤の居城たる千葉に伝うべき建築彫刻等の少きもまた、当然の理なり。

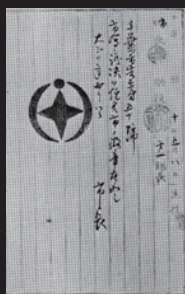
「千葉氏」をよりどころとした人々の〈歴史〉—「千葉町」から「千葉市」へ—（久保 勇）

五、市制施行と開府八百年祭

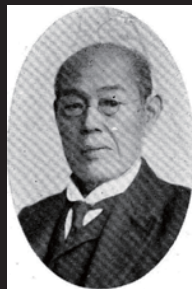
●市制を迎えた「千葉」の認識

～神田清司初代市長の式辞

千葉は海陸形勝の地在昔豪族千葉氏の築きて威武を耀せし所、当年将士の第宅、商売の店舗櫛比繁栄関東唯一の城市たりし。権勢の集団は久しからず、後千葉氏の凋落と共に衰頹し、纔に瀬海佃漁の一寒村として存するに過ぎず、然るに聖代文明の恵沢は永く此の枢要の地寂寥し了せしめず、置県以来機運勃興諸官衙学校及び病院の設け、交通々信の機関が備り、戸口日に殖し、商業月に盛ん、自治の根柢、漸く固く、特に近時町勢荐りに進み遂に市制を施くの盛況に達したり。市民輯睦同事に当り経営宜しを得は事業は興隆し、商業は振張り繁栄富庶、千葉氏当時の殷賑を凌駕するに至らん

市制施行
記念アーチ大正11年 月議決
千葉市章
『千葉市史』より

安政元年（1854）岡山県東南條郡高野村生まれ。明治14年千葉県警部、明治19年香取郡長、同22年海上郡長、同年千葉郡長を歴任。千葉県米穀検査所長を経て、大正8年に第9代千葉町町長となり、初代市長として市制を施行した。



「千葉氏」をよりどころとした人々の《歴史》—「千葉町」から「千葉市」へ—（久保 勇）

第六 財政

1. 課税ト一戸及一人當リ累年比較表

年次	課 税			現住人口 一人當リ	現住戸數 一戸當リ
	經常	臨時	計		
大正三年	54,000	20,347	74,347	2.18	15.53
大正四年	65,440	24,777	90,217	2.16	19.97
大正五年	87,100	23,477	110,577	2.17	22.89
大正六年	83,015	34,000	117,015	2.70	13.44
大正七年	87,960	64,549	152,509	4.13	20.67
大正八年	81,100	48,183	129,283	4.28	20.07
大正九年	124,240	70,614	194,854	6.83	30.24
大正十年	150,717	20,000	170,717	8.10	25.42
大正十一年	193,602	218,290	411,892	11.04	37.32
大正十二年	222,380	171,231	393,611	9.86	49.92
大正十三年	244,909	91,220	336,129	8.23	40.11
大正十四年	220,601	112,234	332,835	8.91	42.49
大正十五年	270,080	60,783	330,863	?	?

2. 課税負擔額累年比較表

年次	道府県税	市 税	市 税	計	現住人口 一人當リ	現住戸數 一戸當リ
大正三年	68,956	25,976	63,054	157,110	4.60	27.17
大正四年	77,502	30,710	65,841	169,813	4.53	27.34
大正五年	61,569	39,840	68,021	169,690	4.69	27.16
大正六年	64,177	35,269	62,958	165,584	4.73	26.17
大正七年	77,523	42,917	66,985	187,425	5.84	29.10
大正八年	90,608	57,270	96,699	244,526	8.10	27.99
大正九年	80,180	84,810	137,492	292,183	9.28	44.22
大正十年	100,508	112,019	134,464	320,341	16.97	60.64
大正十一年	142,314	130,203	210,925	489,443	32.71	68.68
大正十二年	128,648	129,220	222,469	600,957	12.10	63.85
大正十三年	146,531	112,711	218,451	604,300	12.33	60.18

第五 戸口ノ盛衰

1. 現住戸口累年比較表

年次	戸數	人口		一戸平均 人口	前年比 増減
		男	女		
明治二十二年	2,184	?	?	21,672	6.8
明治二十三年	2,071	?	?	22,740	6.8
明治二十四年	3,698	?	?	23,618	6.0
明治二十五年	3,748	?	?	25,951	6.6
明治二十六年	3,822	?	?	24,061	6.4
明治二十七年	3,891	?	?	24,800	6.4
明治二十八年	3,923	?	?	25,067	6.5
明治二十九年	4,056	?	?	26,229	6.5
明治三十年	4,244	?	?	27,713	6.5
明治三十一年	3,668	?	?	25,434	7.1
明治三十二年	3,648	13,927	11,960	25,887	7.1
明治三十三年	3,522	14,139	12,169	26,308	7.2
明治三十四年	3,740	14,382	12,420	26,802	7.2
明治三十五年	3,861	14,700	12,804	27,504	7.1
明治三十六年	3,288	14,954	12,950	27,904	7.0
明治三十七年	4,154	14,807	13,185	28,002	6.9
明治三十八年	4,025	15,076	13,772	28,848	7.2
明治三十九年	4,078	15,927	14,247	30,174	7.4
明治四十年	4,335	16,316	15,167	31,483	7.2
明治四十一年	4,664	16,687	15,470	32,157	6.9
明治四十二年	4,789	17,189	16,514	33,703	6.9
明治四十三年	5,207	17,901	16,105	34,006	6.6
明治四十四年	5,337	18,530	16,770	35,300	6.4
大正元年	5,644	19,648	17,618	37,266	6.4
大正二年	6,054	18,127	17,134	35,261	6.8
大正三年	6,159	19,813	17,568	37,382	6.9
大正四年	6,243	21,008	18,922	39,930	6.4
大正五年	6,523	19,367	17,718	37,085	5.9
大正六年	6,323	18,323	16,999	35,322	5.5
大正七年	9,441	15,682	16,280	31,962	5.0
大正八年	6,441	14,008	14,144	28,152	4.7
大正九年	6,696	15,869	15,719	31,588	4.8
大正十年	6,918	17,693	16,784	34,477	4.9
大正十一年	7,188	18,069	17,626	35,695	5.0
大正十二年	7,893	19,246	20,258	39,504	5.0
大正十三年	8,280	19,907	20,990	40,897	4.9
大正十四年	8,020	20,182	20,997	41,179	4.8

五、市制施行と開府八百年祭

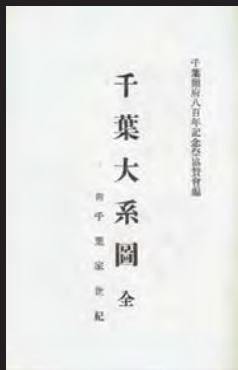
【参考】『千葉開府八百年記念 数字上より見たる千葉市の変遷』千葉市編、大正15年（1926）

「千葉氏」をよりどころとした人々の《歴史》—「千葉町」から「千葉市」へ—（久保 勇）

五、市制施行と開府八百年祭

●開府八百年祭（『八百年祭誌』「趣旨」）

斯くの如く本市は開府以来幾多の変遷を重ねたりと雖も、今や東京郊外の都市として、交通商業軍備産業教育の上に、ますます重要な位置を占め日進月歩ますます殷賑を極めんとす。しかもその源を尋ねれば、千葉氏四百年の恩恵は決して忘却する能わざる処なり。而して本年は恰も千葉常重卿本市開拓以来、正に八百年に相当するを以て、茲に市民相胥り、千葉氏累代の位霊を慰むると共に、市の紹介と市将来の発展に資せむがため記念祭に併せて諸種の催事を行ふこととなれり。斯くの如く本記念祭の執行には、深遠の意義と重大の目的を有す。而かも其の主唱者たるや市の名譽職始め、名望家有力者なるを以て、特に深遠の意味あるを窺知すべし。市の協賛会が多大の犠牲を払い、以て本計画を援助せられたる。またその他公私設団体並に有志諸氏が多大の期待を以て助力せられたるも、要するに如上の理由に深く共鳴せられたるを感じずむはあらず。



【画面21】

「千葉氏」をよりどころとした人々の〈歴史〉—「千葉町」から「千葉市」へ— (久保 勇)

五、市制施行と開府八百年祭

【参考】

千葉開府八百年記念祭協賛会編

『千葉大系図 全』同協賛会、大正15年6月

緒言

大治元年千葉常重卿猪鼻丘に城居せられしより正に八百年、既往を回顧して報本反始の情禁する能はず。茲に千葉氏祖宗の英靈を慰め、且其の史蹟に鑑みんと欲し、記念祭を行ふの議成り、常重卿の入城せられし六月一日を以て千葉神社に奉告祭を挙げ、翌二日を以て大日寺に慰霊祭を行ひ、一日より五日間史料展覧會、史蹟講演會、史劇並に諸種の會合餘興を催すこととなれり。

是に於て千葉氏歴代の偉業を弘く江湖に知らしめ、永く顧念せしむる資料として、本書を發行頒布することとせり。此書千葉大系圖は千葉氏の末葉重胤卿の執筆なりと傳へられ、千葉系譜十餘種中最も憑據すべき價值ありと稱せらるゝものなり。又更に其の目次を作製して索引の便に供し、且千葉氏六百年間の歴史を概観せしめんが爲め、千葉家世紀を編して之に冠せり。讀者は彼此對照して千葉氏回顧の資とせらるれば幸甚。

大正十五年六月一日 千葉開府八百年記念祭協賛會

【画面22】

「千葉氏」をよりどころとした人々の〈歴史〉—「千葉町」から「千葉市」へ— (久保 勇)

六、千葉氏をよりどころとした人々

●紅谷四郎平（べにたにしろうへい）

「妙見堂再建寄附帳」安政6年

↓先代の名が寄付者として挙がる

「千葉氏遺跡保存会」明治35年5月

↓發起人として名が挙がる

↓評議員・幹事に選出される

「千葉公民会」明治39年

↓会長・加藤町長、副会長・紅谷四郎平

交通兵旅団への兵營地寄附 明治39年8月

↓「自分所有の山林一万五千坪」の寄附

「市制調査委員会」明治42年10月

↓常任委員に選任される

「八百年祭」大正15年6月 67歳

↓千葉開府八百年記念祭協賛会会長

↓個人寄附三百円（第四位）、千葉割引銀行二百円

行二百円

安政6年（1859）山武郡大和村生まれ。明治24年紅谷家の養子となる。

日清戦争に従軍。明治 年千葉割引銀行（資本金・12万円）を創業。明治9

年千葉電灯株式会社創業。明治41年劇場衆楽館を開館。町会議員も務め、千

葉町繁栄に多大な功績を残した。昭和

4年、1歳にて死去（墓所胤重寺）



【画面23】

「千葉氏」をよりどころとした人々の《歴史》—「千葉町」から「千葉市」へ— (久保 勇)

六、千葉氏をよりどころとした人々

●武本為訓（たけもといくん）

「千葉氏研究会」準備会 明治42年

↓準備会主要メンバー4名の一人

千葉県県議会議員 大正4年

『印旛沼開鑿記』刊行 大正7年

千葉市 第一回市議会議員当選 大正10年

千葉信用組合創立 初代組合長 大正13年

「八百年祭」大正15年6月

↓千葉開府八百年記念祭協賛会副会長

明治5年（1872）11月市原郡高滝村生まれ。医師。千葉町北辰病院の副院長などの後、明治35年に寒川に浩生医院を開業（41年に吾妻町に移転）。昭和32年12月登戸町にて死去。65歳。



【画面24】

「千葉氏」をよりどころとした人々の《歴史》—「千葉町」から「千葉市」へ— (久保 勇)

◎まとめと展望

●近世末〜明治前半期

・妙見寺門前の人々とその周辺（信仰）

・千葉県の成立と県都千葉町の存在

※「千葉氏」の過去が回顧可能となる状況

（千葉氏歴代建碑設置運動、千葉氏遺跡保存会）

●明治末〜大正末

・千葉町の繁栄を志し、千葉氏の過去を探究

（加藤町長時代の諸事業）

・千葉市の成立・達成を果たし、市将来の発展に役立つ営み
（市制施行、八百年記念祭）

●「千葉氏」によった人々

・千葉町に移り住み、千葉の街の人々とともに地域の繁栄を望んだ有力者たち

「其の主唱者たるや市の名譽職始め、名望家有力者なるを以て」（『八百年祭誌』）

【講演2】

「源平闘諍録」が語る千葉氏のアイデンティティ

源 健一郎(四天王寺大学人文社会学部教授)

講師紹介

司会 講師の源健一郎先生のご略歴を紹介させていただきたいと思います。源先生は、本日、大阪の四天王寺大学のほうからおいでくださいました。先生、お足元の悪いところ本当にありがとうございます。ご略歴でございますが、先生は関西学院大学文学部、大学院修士課程、博士課程を修了されたのち、一九九六年に、四天王寺国際教科大学人文社会学部で専任講師となられておられます。現在は四天王寺大学の教授で、日本学科長、エクステンションセンター長等の要職を務められておられます。ご専門は日本の中世文学。久保先生と同様『平家物語』研究を軸にされておられますが、特に諸本のでき方と、それを取り巻く宗教的環境についての研究に取り組みられておられます。本日取り上げていただきます『源平闘諍録』も『平家物語』の諸本の一つだそうでございますが、この本につきましては、二〇〇六年に『巡礼記研究』第三号に「千葉妙見の本体・本地説―源平闘諍録と千葉妙見関係資料との間―」という論文を発表されておられます。千葉から離れた地の源先生のような研究者のお話が、私どもにも、また新しい視点を与えてくださるのではないかと期待をいたしております。それでは先生、どうぞよろしくお願いいたします。【画面1】(※画面番号は44ページ以降の各スライド資料左上の番号に対応)

皆さん、こんにちは。四天王寺大学からまいりました源と申します。本日は『平家物語』の諸本の一つであります『源平闘諍録』についてお話をさせていただきたいと思えます。『平家物語』にはたくさん諸本があります。そのたくさん諸本の中の一つでありますが、その諸本の中でも極めて独特、特殊な伝本の一つがこの『源平闘諍録』であります。時には源平合戦の歴史を物語るところから逸脱をして、千葉氏の歴史を物語っていくというところに、『平家物語』の一異本ではあるわけですが、際立った特色があります。今日はこの『源平闘諍録』を通じて、千葉氏のアイデンティティがどのように語られているのかということについてお話を申し上げます。先ほど久保さんは千葉氏をよりどころにする人々のお話をなさいましたけれども、私は中世の千葉氏がよりどころにした物語についてお話をさせていただきます。お手元には本文資料(52ページから掲載)をお配りしております。前のスライド(44ページから掲載)にはその要約や要点を示してまいりますので、適宜照らし合わせながらご覧下さい。



【画面2】はじめに『源平闘諍録』に語られる独特な千葉氏と妙見神の物語について、その梗概を本文資料のほうに資料1として挙げておきました。基本的な内容になりますので、読んでおきたいと思います。「氏神として千葉氏に尊崇された妙見は、渡る神（菩薩）であった。人が神の下に詣でるのでなく、選ばれた者の下に妙見は渡り、その姿を現し、効験を与えたのである。最初に選ばれたのは平将門であった。建武四年に書写、文和四年に転写された『平家物語』異本『源平闘諍録』によると、承平五年八月、上総介良兼の軍勢によって、蚕飼川の端に追いつめられた将門の前に、突然、童子が現れた。将門一行を向こう岸に渡らした上、矢戦を助けて勝利をもたらしたこの童子は、正体を上野（こうずけ）の花園寺に鎮座する妙見大菩薩であると明かし、将門を迎えを請う。こうして妙見神は将門のもとに渡り、五年の内に将門は東八カ国を従える親王となったのである。しかしながら、その結果、将門の本性は正直から諂佞（てんねい）・非常に賢い悪いことへと転じ、将門を見限った妙見は、将門の養子である平良文のもとに渡っ

てしまう。妙見の去った将門が滅びる一方で、将門のもとにあった妙見は、その子、忠頼に渡り、以降、良文流平氏、板東八平氏の一つ、千葉氏嫡家、千葉介に代々伴い、家勢を支えた。それから時を経て、源平合戦。頼朝の挙兵に応じた当時の千葉介常胤の留守中、平家方であった千田判官代親正の率いる大軍が千葉の結城へと進む。これを常胤の嫡孫、成胤がわずか七騎で迎えるが、たちまち境川の端に追いつめられる。そこに再び渡り現れたのが、童子に姿を借りた妙見であった。妙見の助力もあって、親正勢は撤退をする。妙見の奇跡を耳にした頼朝は、自らの下にも妙見が渡ることを望むが、常胤は、妙見は千葉氏嫡家にのみ渡るものであり、千葉介の帰服こそが妙見からの助力であることを頼朝に説いた。」こうした物語が『源平闘諍録』の中に盛り込まれています。この物語の要点を前のスライドに挙げました。二つの戦からこの物語はなっています。一つ目は将門の乱。妙見神に選ばれた平将門は東八カ国を従える親王となった。しかしながら、正直から諂佞へと転じ、将門は妙見に見限られ、新たに妙見神に選ばれたのが平良文。その子、忠頼以降、良文流平氏の一つ、千葉氏嫡家に代々伴うという物語がその一つであります。

【画面3】もう一つは源平合戦の物語。頼朝の挙兵に応じた当時の千葉介常胤の留守中に、千田親正が急襲をいたします。常胤の嫡孫、成胤が応戦をします。そこに妙見神が現れて親正は撃退をされる。この妙見神の奇跡を聞きつけた頼朝が、自らのもとにも渡って

もらいたいという言うわけですが、千葉介の帰服自体が妙見からの助力であると常胤は説いたということです。『源平闘諍録』に独自の、これら二つの物語は、中世千葉氏にとって自らのアイデンティティをどのように保障するものであったのでしょうか。以降は『源平闘諍録』の本文に基づきながら、お話を進めてまいりたいと思います。

一 将門・良文故実の機能―渡る神としての妙見―

【画面4】千葉氏にとってという問題を考えて参りましょう。資料の見出しに、将門・良文故実という観点を示しました。故実というのは、自らの、それこそよりどころとなる歴史のことを故実というふうに申します。ここにこういうことがあるから今の自分があるのだと常に参照される、振り返られる出来事や歴史・人物が故実であります。千葉氏にとっての大きな故実は、将門・良文というこの流れの中に、自らの千葉介の歴史があるということでありました。そのことは『源平闘諍録』の諸所にうかがわれます。例えば資料1、これは『平家物語』諸本に共有する記事で、物語の一番最初に平家の歴史が語られるくだりです。平家の歴史から千葉氏の歴史へと大きく逸脱するのが闘諍録の特徴であり、妙見神が将門から良文へと渡ったところに語られるわけです。将門から良文へ渡るといえるのは、実は非常に奇妙な設定でありまして、良文は将門の叔父であります。叔父であるにもかかわらず、闘諍録は、良文は将

門の養子となったのだとまで語ります。そうすることによって、将門から、その養子となった良文へと妙見神が渡るということを正当化するわけですね。良文から、次男でありましたが、実質的には嫡男である忠頼。忠頼から、その嫡男の忠常へと、代々千葉氏嫡流へと渡っていく妙見神の在り方というものが、この資料1の本文の中に語られているわけです。このような闘諍録の物語については、先行研究の中でもさまざまに問題視をされています。闘諍録は、幕府草創期の南関東在地領主たちを千葉氏の祖である良文流に主眼を置いて系譜づけており、『平家物語』の主人公とも言うべき忠盛、清盛系の扱いは極めて粗雑であり、『平家物語』の叙述としてふさわしいものとはいえないといった指摘があります。闘諍録が特殊であるという由縁はここにあるのです。平家の物語なのに、その平家の忠盛、清盛系の系譜についてはほとんど語ることなく、この良文流平家、あるいは板東八平氏、こちらのほうに力点が置かれている。国香流の、特に北条氏系譜においては、板東八平氏系譜中に見えるような顕彰の姿勢は見られない。かといって、鎌倉期に覇権を握った北条氏、これも平氏の血を引いておりますけども、この北条氏については極めて冷淡であるというわけですね。一方で忠常には、良文流平氏の嫡流千葉介こそが、良文流平氏、板東八平氏の嫡流であるのだというような物語がここに語られている。こうした指摘がされているというところに、この闘諍録という『平家物語』の特殊性があるということになります。



【画面5】次に資料3がありますが、この資料3は巻が飛びまして、巻の第五になります。巻の第五は、ちょうど頼朝が挙兵をする物語が語られる巻になります。その頼朝の挙兵の物語の中で、また再び妙見神と千葉介の物語が挿入をされている。これも闘諍録に独特のところであります。ここに語られておりますのは、それこそ将門の乱における蚕飼河での妙見神の助力についてです。注意して頂きたいのは、「シンノウ」の表記です。闘諍録では、千葉宗家関係の資料でもそうですけれども、将門は、親に王。天皇の御子としての「親王」ですね。このような表記がなされます。本来は、将門は「新皇」ですね。新しい天皇と称した。これが国家にとつての大きな反逆であったわけですが、そうした新しい王としての将門の反逆性というものを薄めて、天皇の御子としての親王というふうに改めて、物語は将門という存在を受け入れているということになります。妙見神は親王たる将門から良文へ、闘諍録は度々これを繰り返す

わけですが、今度、良文に妙見神が渡り、さらに常胤までが見通されます。常胤までの七代、嫡流代々に妙見神が伴っ

ていたのだということが、この資料2の中に物語られているのです。すなわち、闘諍録では、源平合戦期における千葉介常胤のアイデンティティは、将門から良文へと渡っていく妙見神の助力にあると位置付けられるわけです。次に、千葉氏の歴史について調べるときによく参照される千葉宗家関係資料から、『千学集抄』を資料4として挙げておきました。

【画面6】実は、こうした千葉宗家周辺資料群におきましては全く違う故実が語られています。「新皇」を「親王」とする点は共通をしますが、妙見神は、親王将門と良文との連合軍に対して協力をするという立場で現れてきます。しかも妙見神に対する信仰は、将門から引き継いだものではなくて、良文の母が妊娠中から妙見神に帰依をしていたから妙見神は良文のもとに渡ったのだとするのが、この『千学集抄』等の千葉妙見社、千葉宗家関係資料に共通する伝承であります。むしろ、こちらのほうが広く受け入れられた伝承であるわけですから、その点において闘諍録はやはり特殊なのです。こうした両者の相違につきましても、先行研究において度々指摘をされています。例えば近世千葉妙見社の伝承のいずれもが、逆賊、将門の処理に苦慮しているのは、将門は天皇家に反逆をした逆賊であるからだという見方があります。将門をどのように千葉介の歴史の中に位置づけるのかというのは、なかなか難しい問題でありました。闘諍録は先行する千葉妙見伝承をよく理解しながら、あえて、非常に突飛な設定を用いることまでしながら、あのような故実を語って



いたということになるわけですね。先行研究には、将門を敬愛する立場からこのような改変が行われたという指摘もあります。が、私にはどうも敬愛どころではないというふうにも思われます。

【画面7】次の資料5をご覧ください。いただきたいと思います。やはり『源平闘諍録』巻第五、頼朝の挙兵にまつわる記事の中に収められた本文です。この記事には、

頼朝の挙兵に応じた当時の千葉介常胤の留守中、襲撃をしてきた田判官代親正の大軍に応戦する常胤の嫡孫、成胤の様子が描かれます。境川で妙見神が助力をするという内容が語られるところですが、注目しておきたいのは、その成胤の名乗りの部分であります。傍線を引いておきましたが、「平親(王)将門には十代の末葉、千葉小太郎成胤」と語るので、ここには、もう良文をすつ飛ばしてしまつて、将門から直接つながる千葉介のアイデンティティが語られているということになります。比較対象として、千葉妙見社の『大縁起絵巻』における成胤の名乗りをスライドには載せました。『大縁起絵巻』では、まず「陸奥守良文より八代」とあり、この辺は穩

当ですね。そして次に「良文より八代、千葉常胤の孫、胤政の嫡子小太郎成胤、生年十七歳」とあるわけですから、闘諍録がいかに将門に、あるいは将門―良文と渡る妙見神に特別な意味を認めていたか、よくわかります。南北朝期に書写された闘諍録というテキストが、将門―良文を故実とする点に千葉氏のアイデンティティを求めているということ、ここまではまず確認をしておきたいと思います。

二 八幡殿として回顧される義家故実

【画面8】次に、少し視点を変えたいと思います。闘諍録が独特なのは千葉介の歴史についてだけではありません。頼朝に対する把握、認識についても独特な点があります。資料の見出しを「八幡殿」として回顧される義家故実」としましたが、闘諍録では常に頼朝は、あの八幡殿義家の嫡流であるというかたちで物語られていくわけです。そこに故実が求められているという点、闘諍録の特徴として挙げられるのです。資料6は物語の冒頭部分であります。巻第一上には、伊豆に幽閉されている頼朝がどのように暮らしていたのかが語られます。資料7は、先ほども触れた頼朝が挙兵をする場面です。まず資料6ですが、これは頼朝から伊東祐親の娘に対する求婚の意思を聞いた佐々木太郎定綱が、その背中を押す場面となります。本文の傍線部に「況や君は六孫王の苗裔、八幡殿四代の末葉、東国の奴原が為には重代の主なり」とあることに注意が必要です。頼朝

に対して、あなたは八幡殿、すなわち源義家の四代の末葉だからというわけです。源義家といえば、奥州の十二年合戦(前九年・後三年の役)で大活躍をした源氏の中でもカリスマを誇る武士であります。源氏のカリスマである義家の末葉であるということがことさらに、このように強調されるのです。そのような趣向は資料7の頼朝が挙兵をするくだりでも繰り返されます。奥州の秀衡を頼ろうとする頼朝を梶原景時がいさめる場面です。それはよろしくないと言説するために、景時は次のように秀衡の出自を説きます。「其の故は、君の御先祖八幡殿の御代官権大夫常清の男清衡、奥州の鎮守府將軍に補せられたりしより以来、秀衡は既に四代なり」云々とあります。秀衡の出自を語るなかに、ことさらに「君の御先祖八幡殿」と挿入されるのです。資料6、資料7の八幡殿の記述は、どちらも『源平闘諍録』に独特で、ほかの『平家物語』には見られない記述でもあります。

【画面9】このように、頼朝を語る際に常に八幡殿義家を参照するという闘諍録の姿勢は資料8にも見受けられます。資料8については、ほかの『平家物語』諸本の中にも同じ記事があります。資料8aに挙げました延慶本という『平家物語』は、延慶二年、延慶三年(一二三〇九年、一二三一年)という本奥書を持つテキストでありまして、あちらこちらに『平家物語』の最も古い姿をとどめていると考えられています。資料8bに挙げましたのは、四部合戦状本と呼ばれるテキストであります。成立時期ははっきりいたしません

が、関東の浄土宗圏で成立したのではないかという指摘があります。闘諍録も千葉氏の周辺で成立をしていますから、関東で成立をした『平家物語』という点では、この四部合戦状本と闘諍録は共通をするということになります。

テキストの紹介はここまでとしまして、これから闘諍録のある場面について、最も古いとされる延慶本と、同じ関東で成立をしたと目される四部合戦状本と比較をしてみたいと思います。資料8に挙げた闘諍録巻五・四のお話は、富士河の合戦のために白旗を持つて帰参した畠山重忠の言葉であります。源氏の旗印である白旗を持つて来たわけを頼朝が聞き、重忠が答える内容です。ここには、八幡殿による奥州合戦、十二年合戦の先例としての重要性が説かれています。自分がこの白旗を持ってきたのは、義家による奥州合戦に由来があるのだということを重忠は力説をするわけですね。ここにも、頼朝挙兵に対する重忠の助力は、十二年合戦における義家の故実によってそれが実現したのだと位置づけようとする闘諍録の意図が見受けられるわけです。ただ、安倍貞任を討つと明記されていますが、それは前九年の役のことなのです。当時の鎮守府將軍は父親の頼義であり、それをことさらに義家というふうに語るところに、八幡殿義家を中心に把握をしようとする闘諍録の姿勢が現れています。では、この同じ場面がほかのバージョンではどのように語られているのか確認してみましょう。古熊を残す延慶本でも、確かに八幡殿義家の故実が引かれています。しかし傍線部に「御先

祖八幡殿」とあるように、あくまで古い例として八幡殿義家の例が挙げられるんですね。またその先には「近ハ御舎兄惡源太殿」とある。ここには義家の例だけではなくて、近くはとして惡源太義平の故実が引かれます。闘諍録では義家の先例に基づいて重忠は動いたわけですから、義家の故実とは絶対的な意味を持つのですが、延慶本では義平の故実も引くことで、義家の故実とは相対化されてしまっているということになります。先例としての十二年合戦に対して、ここでは義平が叔父義賢を討つ大倉合戦が対置されるのです。十二年合戦自体の絶対性も相対化されてしまうということになります。しかも、この延慶本におけるこのような故実の対置は、『平家物語』のほかのバージョン（長門本や源平盛衰記など）にも共通していますから、『平家物語』の総体的な認識としては、このように二つ並べるほうが普通だということになるんですね。闘諍録は、恐らくは延慶本の本文を見えています。見ているのだけれども、惡源太義平の故実を削除してしまう。削除して義家の故実を集約をしたという、そういう作偽が見て取られるのです。次の資料8b、同じ関東圏の成立と目される四部合戦状本では、今度はまた違う故実が引かれています。「是は、御先祖頼義朝臣、奥州の埴岡を迫めに下りたまひし時、秩父太郎大夫六歳の時にて候に」云々ということで、頼義の故実なのです。貞任を攻めた前九年の役であれば、頼義の功績として顕彰されることは十分にあり得ると先ほど申し上げた通り、四部合戦状本では、これを頼義の故実として扱うわけです。この四部合戦

状本における頼義自体が問題ではあるわけですが、それはのちに触れることとして、ここでは闘諍録が義家にすべてを集約し、顕彰する独特な姿勢を持つことを押えておきたいと思っています。

【画面10】もう一つ例を挙げたいと思います。資料9には、頼朝が伊東祐親の娘と通じたことを知って激怒した祐親が、二人の間に生まれた子どもを殺してしまう事件が物語られています。子どもを殺されたことに憤った頼朝は、祐親を返り討ちにしようと、伊豆箱根の二所権現に祈願します。この場面には、次のような構造を見て取ることができます。最初の波線部に「嫡男義家を以つて八幡大菩薩の氏子と為し」とあるように、祐親に対して戦を臨んでいくにあたって、自分は八幡大菩薩の氏子である嫡男義家の末葉に当たるとのことであることを神の前で語るのです。次の傍線部では「頼朝は是れ八幡殿より四代の氏子なり」と、やはり義家の末葉にあるのだということが語られ、「然るべくは八幡大菩薩、日本国を頼朝に打ち随はしめ給へ」と祈願します。また次の波線部でも八幡神の加護を祈誓する頼朝の様子が語られています。前のスライドにまとめましたが、十二年合戦において義家が活躍したのは、八幡大菩薩の氏子として活躍をしていたのだという認識がここに現れています。一方で、今ここに、その八幡殿から四代の氏子、義家の嫡流として、八幡神の加護をもって活躍をしようとする頼朝が語られていることとなります。頼朝が、十二年合戦の先例において八幡大菩薩の氏子として活躍をした義家に、そのまま重ねられているわけです。こ



のように闘諍録では、常に頼朝という存在は八幡殿義家の故実の中で、あるいは十二年合戦という先例の中で位置づけられていくのですが、そのことをどう考えるべきでしょうか。

【画面11】実はこれについては、もう既に日本史の先行研究において重要な指摘がなされています。川合康さんという日本史の研究者の方がおられますが、その見解を資料10、資料11として二つ示しておきました。例えば、先ほど四部合戦状本を見たときに、頼朝は頼義の故実によって語られていました。このような姿勢は、川合さんによれば、源平合戦期や頼朝が幕府を草創した時期、頼朝は、頼義の故実に基づいて奥州合戦を前九年合戦として演出し、頼義の武

功を強烈に認識させる一方、自らを唯一の頼義後継者として位置づけたことに通じるものだと考えられます。物語として語られることが現実の中に適応されていったのです。頼朝は十二年合戦における頼義の武功談を、奥州合戦における現実の中に当てはめ、人々にそれを強烈に認識させたという指摘です。この見解を前提にすれば、四部合戦状本が頼義の故実において頼朝

を語ろうとするのは、源平合戦期の、あるいは鎌倉幕府草創期の頼朝の認識、意識に沿ったものがそこに現れたと考えることができるわけです。問題は、闘諍録が頼朝を常に義家の故実において語ることです。資料11で示される川合さんの指摘がまた重要です。足利宗家による源氏の嫡流工作は、義家直系を主張することによって行われたのだという指摘です。その背景には、義家の息、義国から分派した足利氏独自の氏意識があり、頼義の家系を相対化する政治的意味も、そこには考えられると川合さんは指摘しています。闘諍録が度々繰り返す、頼朝に対する義家故実を通じた把握というものは、いみじくも、この足利氏が自らの権力を保障するために喧伝した義家故実の在り方と重なり合うということが言えるわけですね。では、千葉氏の歴史に肩入れする闘諍録というテキストは、どうしてこのような、足利氏の認識にも通じる、義家故実によって頼朝を描こうとしたのでしょうか。この問題については、次にお話をさせていたきたいと思います。

三 十二年合戦の先例の意味するもの

【画面12】千葉氏にとって、義家とは何なのか、奥州合戦とは何なのか、十二年合戦とは何なのかというところから改めて考えて参りましょう。資料12をご覧ください。これも闘諍録に独特の記事であります。良文流平氏における十二年合戦時の八幡殿義家との関係

及び、頼朝挙兵時の鎌倉殿頼朝との関係について物語っていくのが、この記事の内容ということになります。最初に線を引いたのが千葉氏に関係するところであります。ここには、千葉氏宗家のみが八幡殿の「御共」であるという認識が表され、十二年合戦では「海道の大将軍」を務め、そしてまた、源平合戦期、鎌倉殿頼朝にとっては「左の一座」を占めた。そのような認識がここに語られるのです。この記事にはそのほかに、畠山、三浦、梶原といった板東八平氏がありやうというものが同じように、十二年合戦ではこう、鎌倉殿にとってはこうという、そういうパターンで語られていきます。畠山氏については、十二年合戦では「先陣の大将軍」、鎌倉殿にとっても「先陣の大将軍」であり、この畠山氏とペアになる梶原氏については、十二年合戦では「後陣の大将軍」、鎌倉殿頼朝にとっても「後陣の大将軍」であるということです。畠山と梶原は、頼朝につき従う軍勢の先陣と後陣を務めるのが役割であると位置づけられるのです。両者の間に三浦氏について記されますが、三浦氏は十二年合戦では「高兵（高名）七人のその一」、すなわち頑張った七人の中の一人ということですね。鎌倉殿頼朝との関係については明らかにされません。このように、この記事を通じて、十二年合戦において千葉介、千葉氏宗家のみが八幡殿義家とともに居並ぶ立場であり、鎌倉殿頼朝の挙兵においては「左の一座」を占め、のちに「海道の大将軍」を単独で担ったのだと主張されるのです。

【画面13】次の資料13をご覧ください。やはりこれも闘諍録に独

特の記事です。頼朝挙兵の際に活躍した成胤を称賛した頼朝が、戦の場において奇跡を起こした妙見神を自らのもとに渡御してもらいたいと常胤に依頼したという内容で、すでにあらすじとしてご紹介した記事です。波線部には、その回答として「余の仏神にも似ず、天照大神の三種の神器の、国王と同じく居たまひてこそ」とあります。千葉氏と妙見神の関係は、天照大神（天皇家の祖先神）、あるいはその象徴である三種の神器が国王、天皇家と一体であるのと一緒だと主張するのです。「代々の御門を護りたまふが如し。此の妙見大菩薩も、将門より以来嫡々相ひ伝はり、寝殿の内に安置し奉りて、未だ別家へ移し奉らず」とあるように、妙見神を頼朝のもとへ渡すというようなことはあり得ないということも言います。天照大神と天皇家の関係に同じく、将門以来、妙見神と千葉宗家は一体であり、妙見神は他人には渡り得ないと常胤は説いたわけです。そのうえで、常胤は次のように畳みかけるんですね。「一族為りといへども本躰は永く末子の許へは渡られず。何に況んや、他人においてをや。詮ずる所常胤君の御方へ参り向かつ



て仕へたるを、偏に妙見大菩薩の御渡り有ると思食され候へ」と言うわけです。千葉宗家常胤の頼朝への帰参こそが、妙見神の頼朝への渡御にほかならないとの主張です。すなわちこれは、妙見の加護を得ようとすれば、八幡殿嫡流の頼朝でさえ千葉氏宗家と協働しなければならぬということです。義家の故実と、将門・良文の故実がどう結びつくのかというのは、ここにおいて明らかであろうかと思ひます。八幡神とは天皇家が尊崇する宗廟神でもありました。天皇家の宗廟神、源氏の氏神としての八幡神は、ここにおいて将門の親王という東国の王権に由来し、千葉氏宗家の氏神でもある妙見は居並ぶものとして位置づけられたのです。だから、この両者はお互いに協働してこそ大きな権力を動かすことができるのだという、そういう歴史観がここにあるのです。これが源氏の側から発信されるはずはなく、やはりこれは、千葉氏の側からの主張ということになります。

【画面14】さて、本文資料としては最後になりますが、資料14をご覧ください。この本文は、ほかの『平家物語』にもほぼ共通する本文です。物語の冒頭部において、朝廷と武家との間のあるべき関係性について述べる内容です。武家というものは、朝廷を守護し、朝廷に仕えることが、第一の本分であると規定し、武家の二つの流れである源氏と平家はお互いに支え合いながら天皇家を守るべしとあります。それでこそ安泰な世の中がもたらされるのだというわけです。これが武家の朝廷に対する関係性の理想形なのですが、にも

かわらず、現状がそれから逸脱していると述べられます。源氏と平家のパワーバランスが崩れてしまつて、源氏がみんなやられてしまつて平家だけが隆盛を誇るようになったと指摘するのです。理想形から離れているのだから世は末となり、恐ろしい動乱がこれから起こっていくだろうと示唆するのです。『平家物語』の最初に置かれるには非常にふさわしい内容であるといえましょう。しかし、実は、闘諍録にだけ、「国家を護る棟梁なり」という表現が付け足されているのです。源平両氏が鳥の二つの翼のごとく、車の二つの輪のごとく、互いに朝家に召し使われれば、それはまさに「国家を護る棟梁」であるのだという表現です。これについて、今までの検討を前提にすれば、次のようなことが考えられるように思ひます。基本的にはこの文脈は、当然源氏と平氏、この平氏というのは忠盛から清盛の平氏、伊勢平氏のことです。ただし、「国家を護る棟梁」という表現をあえてつけ加えることによって、義家流の頼朝と、将門・良文流の千葉宗家が「御共」に「国家を護る棟梁」となるという理想を示すものと考えておきたいのです。

なぜ闘諍録は将門・良文流の故実を重要視したのでしょうか、また同時に、頼朝を把握する際に、なぜ義家の故実を重要視したのでしょうか。それは十二年合戦の先例において千葉氏と源氏は結びつき、そして今、源平合戦の時代においてもその両氏が結びつく大きな根拠となつたからなのです。こうした言説が導入された闘諍録は、千葉氏側の大きなアイデンティティとなつたと言えましょう。

最後に、闘諍録の成立に触れて、本講演を締めくくりたいと思います。

四 何故に△平家物語▽であったのか

【画面15】闘諍録の成立を見通すには、千葉氏は何故に『平家物語』という物語作品を通じて自らのアイデンティティを訴えなければならなかったのかということを考えねばなりません。闘諍録の成立時期については定説がありません。本文資料とスライドA、B、Cと三つの説を挙げておきました。もともと古い説には、その原形は宝治合戦の直後、13世紀の半ばには既にできていたとする見方があります。一方で、そこまでは遡れないだろうと、13世紀の終わりから14世紀の初め頃を想定する見方もあります。一方でCには、奥書の建武四年（一三三七年）からほとんど遡らない14世紀初頭頃ではないかという見解が示されています。

【画面16】私自身は、闘諍録の奥書が書かれた建武四年、その直前の時期の千葉氏宗家周辺の政治情勢を考えることで、なぜ『平家物語』なのか、あるいは、闘諍録が編集される意味について考えることができるように思っています。資料に年表を示していますので、その内容をかいつまんでご説明しましょう。鎌倉末期には、だんだん幕府の権力が衰えてまいります。幕府の権力が衰えてきたときに、反幕府方として、倒幕に活躍をしたのが千葉宗家、千葉介でありま

した。しかし、倒幕に功績を挙げながら、千葉介は地元においては大きな火種を抱えていました。本来嫡流であり、肥前千葉氏の祖でもある千田氏、あるいは、千田荘内の在地武士との紛争を抱えていたのです。地元での対立関係を抱えながら、大きな国の動乱に千葉宗家は直面するわけですが、建武二年（一三三五年）の中先代の乱では、尊氏による反新政の挙兵に千田胤貞が、尊氏の追討の新田軍には千葉介の貞胤が参加をします。この段階で尊氏方と新田方に、千田氏と千葉介が分かれるということになります。建武三年、劣勢の尊氏が勢力を挽回し、これにはずっと千田胤貞が同行しておりました。ついには後醍醐天皇と講和し、尊氏が覇権を握ることになります。こうなると、新田と結んでいた千葉介は大変な苦境に陥ります。越前のほうに逃れていこうというようなことも考えますが、結局千葉介は足利方に帰服をするということがありました。このように南北朝の動乱期、特に建武の新政期に、千葉介は、それこそ家の存亡の危機を迎えていたわけですね。一旦足利氏と敵対をしていた千葉介は、再び足利方に帰参し許しを請うて、自らの価値を認めてもらわなければ家が續かない、そういう時期がちょうどこの時期であったのです。この翌年である建武三年、足利方に帰服したちょうどその翌年に闘諍録は書写されています。これは偶然のように私には思えないのです。頼朝の挙兵の段階において、常胤がいかに源氏方にとって意味のある存在であるのかということを闘諍録は、将門・良文流の故実と義家の故実でもって語っていましたが、実はそ

の先の段階にこそ意味があったのではないかと思います。南北朝の動乱期において、源氏の嫡流工作をしていた足利氏は、まさしく義家の末流を名乗ったわけです。その足利氏に対して、千葉介のアイデンティティを認めてもらい、自らの帰服を許してもらわなければなりません。そのためには千葉宗家に闘諍録のような十二年合戦をも含む源平合戦の物語というものが、必要とされたのではないのでしょうか。ここに『平家物語』(闘諍録)を通じて千葉介が自らのアイデンティティを訴えかけていく所以があったのではないかと私は考えるのです。闘諍録には、建武年間における千葉宗家の政治的危機意識が如実に反映しているというのが、私の闘諍録に対する一つの読み方であるということを経験として申し上げたいと思います。以上、早口でお聞きになりましたところもあったかと思いますが、これにてお話を終えさせていただきます。ご清聴いただきましてどうもありがとうございました。

「源平闘諍録」が語る 千葉氏のアイデンティティ

源 健一郎（四天王寺大学）

平成三十年度 千葉市・千葉大学公開市民講座
千葉氏とアイデンティティ
一軍記物語の語るもの、近代の人々のいとなみー

はじめに

【資料1】源平闘諍録における妙見神と千葉氏に纏わる物語

将門の乱

妙見神に選ばれた平将門、東八ヶ国を従える「親王」となった。

→「正直」から「諂佞」へと転じ、将門は妙見神は見限られる。

新たに妙見神に選ばれたのは平良文。

→その子、忠頼以降、良文流平氏（板東八平氏）の一、
千葉氏嫡家（千葉介）に代々伴った。

はじめに

【資料1】源平闘諍録における妙見神と千葉氏に纏わる物語

源平合戦

頼朝の挙兵に応じた当時の千葉介常胤の留守中、
平家方の千田親正が急襲、常胤嫡孫、成胤が応戦。

→妙見神の助力によって親正撃退。

妙見神の奇跡を求める頼朝

→千葉介の帰服が妙見からの助力であると常胤は説く。

1 将門—良文故実の機能—渡る神としての妙見—

【資料2】源平闘諍録一之上・一 * 諸本に記事なし

* 妙見神は将門から良文(叔父でありながら将門の養子)へ

→次男(実質的嫡男)忠頼からその嫡男忠常へ

=千葉氏嫡流に渡っていく妙見神

#『闘諍録』は幕府草創期の南関東在地領主たちを、千葉氏の
祖である良文流に主眼をおいて系譜づけており、『平家物語』の主
人公ともいべき忠盛—清盛系の扱いはきわめて粗雑で、『平家』
の叙述としてふさわしいものとは言えない。

#国香流の、特に北条氏系譜においては、板東八平氏系譜中に見
えるような顕賞の姿勢は見られない

#忠常には良文流平氏の嫡流としての地位が与えられている。

1 将門—良文故実の機能—渡る神としての妙見—

【資料3】源平闘諍録巻第五・三 * 諸本に記事なし

- * 【資料1】の本文資料(将門の乱)
- * 蚕飼河における妙見神の助力
- * 「親王」将門
 - 良文(叔父でありながら将門の養子)
 - 常胤まで七代
 - = 千葉氏嫡流代々に伴う妙見神

1 将門—良文故実の機能—渡る神としての妙見—

【資料4】『千学集抄』

- * 「親王」将門と良文との連合軍に協力する妙見神
- * 妙見神示現は、良文母が妊娠中から帰依していたため
- * 『千学集抄』他千葉妙見社関係資料に共通する伝承

近世千葉妙見社の伝承のいずれもが、逆賊将門の処理に苦慮している。

妙見神示現の場が異なること(闘諍録「蚕飼河」、『千学集抄』等「染谷河」)については、闘諍録が先行する千葉妙見伝承を取り入れながら、将門を「敬愛」する立場から改変した。

1 将門—良文故実の機能—渡る神としての妙見—

【資料5】源平闘諍録巻第五・二 * 諸本に記事なし

- * 【資料1】の本文資料(源平合戦)
- * 頼朝の挙兵に応じた当時の千葉介常胤の留守中、襲撃してきた千田判官代親正(平家方)の大軍に応戦する常胤嫡孫、成胤の様子＝堺河における妙見神の助力
- * 成胤の名乗り「**平親(王)将門には十代の末葉**、千葉小太郎成胤」＝良文に触れない
- * 千葉妙見社『大縁起絵巻』における成胤の名乗り
「**陸奥守良文より八代**、千葉常胤の孫、胤政の嫡子小太郎成胤、生年十七歳」

2 八幡殿として回顧される義家故実

【資料6】源平闘諍録一之上・九 * 諸本に記事なし

- * 頼朝から伊藤祐親の娘に対する求婚の意志を聞いた佐々木太郎定綱が、その背中を押す場面
- * 「**八幡殿四代の末葉**」として把握される頼朝

【資料7】源平闘諍録巻第五・四 * 諸本に記事なし

- * 奥州の秀衡を頼ろうとする頼朝を諫める梶原景時の言葉。
- * 秀衡の出自を説く際に「**君の御先祖八幡殿**の御代官権大夫常清の男清衡、奥州の鎮守府将軍に補せられたりしより以来、秀衡は既に四代なり」と言及。

2 八幡殿として回顧される義家故実

【資料8】源平闘諍録巻第五・四

- * 富士川合戦のために白旗を持って帰参した畠山重忠の言葉
- * 八幡殿による奥州合戦(十二年合戦)の先例としての重要性
- * 安倍貞任等を討つ前九年の役の際、鎮守府将軍は義家父、頼義
= 八幡殿義家中心の把握

【資料8a】延慶本第二末・廿…延慶二・三年(一三〇九・一〇)本奥書

- * 「八幡殿」義家+「悪源太」義平の故実(長門本・盛衰記も同様)
= 義家の相対化。
- * 先例として、十二年合戦+大倉合戦(源義賢討伐)
= 十二年合戦の相対化。

【資料8b】四部合戦状本巻第五…成立時期不明。関東浄土宗圏の成立か。

- * 頼義の故実

2 八幡殿として回顧される義家故実

【資料9】源平闘諍録一之上・十一 * 諸本に記事なし

- * 伊東祐親を返り討ちにしようと、頼朝が伊豆箱根二所権現に祈願する場面
- * 十二年合戦において
「八幡大菩薩の氏子」として活躍した義家
- * 「八幡殿より四代の氏子」義家嫡流として、
八幡神の加護を祈願する頼朝

2 八幡殿として回顧される義家故実

【資料10】頼朝が重んじた頼義故実

- * 幕府草創期、頼朝は、頼義故実に基づいて奥州合戦を前九年合戦として演出し、頼義の武功を強烈に認識させる一方で、自らを唯一の頼義後継者として位置づけた。

【資料11】足利氏が重んじた義家故実

- * 足利宗家による源氏嫡流工作は、義家直系を主張することによって行われた。
- * 背景には、義家の息、義国から分流した足利氏独自の氏意識がある。
- * 頼義直系の地位を誇示した頼朝の家系を相対化する政治的意味も考えられる。

3 十二年合戦の先例が意味するもの

【資料12】源平闘諍録一之上・一 * 諸本に記事なし

- * 良文流平氏における十二年合戦時の八幡殿義家との関係、および頼朝挙兵時の鎌倉殿頼朝との関係について明示する。
- * 千葉氏宗家のみが「八幡殿の御共」であり、十二年合戦では「海道の大手の大將軍」、鎌倉殿にとっては「左の一の座」
- * 畠山氏は、十二年合戦では「先陣の大將軍」、鎌倉殿にとっても「先陣の大將軍」
- * 三浦氏は、十二年合戦では「高兵(名力)七人の其の一」、鎌倉殿との関係は不分明
- * 梶原氏は、十二年合戦では「後陣の大將軍」、鎌倉殿にとっても「後陣の大將軍」

3 十二年合戦の先例が意味するもの

【資料13】源平闘諍録巻第五・三 * 諸本に記事なし

- * 頼朝挙兵時の成胤の活躍を頼朝が賞賛し、その際奇跡を起こした妙見神の自らへの渡御を常胤に依頼する場面。 cf.【資料3】
- * 天照大神(三種の神器)と天皇家との関係に同じく、将門以来、妙見神と千葉宗家は一体であり、妙見神は「他人」に渡り得ないと説く常胤
- * 千葉宗家(常胤)の頼朝への帰参こそが、妙見神の頼朝への渡御に他ならないと主張
- * 妙見の加護を得ようとすれば、八幡殿嫡流の頼朝は千葉氏宗家と協働しなければならない。
天皇家の宗廟神・源氏の氏神としての八幡
＝「将門の親王」由来の神・千葉氏宗家の氏神としての妙見

3 十二年合戦の先例が意味するもの

【資料14】源平闘諍録一之上・四

- * 朝廷と武家(源平両氏)と間のあるべき関係性が崩れ、平家のみが繁昌し、「末の世」が到来したと説く一文。基本的に『平家物語』諸本に共有される。
- * 傍線部「国家を護る棟梁なり」は、闘諍録のみの独自文。
- * 「源平両氏」は〈義家流頼朝〉と〈将門-良文流千葉宗家〉が「御共」に「国家を護る棟梁」となる理想を示唆するものか。

4 何故に〈平家物語〉であったのか

【資料15】妙見神威譚の形成時期と源平闘諍録の成立

- A 宝治合戦(一二四七)直後から
泰胤の没した建長三年(一二五一)までの時期
- B 十三世紀後期～十四世紀初期
- C 建武四年(一三三七)から余り隔たらない、
早くても十四世紀初頭は遡らない頃

4 何故に〈平家物語〉であったのか

【資料16】源平闘諍録奥書時期直前における千葉氏周辺の政治情勢

- * 鎌倉末期、反幕府方として倒幕に功績のあった千葉宗家。
- * 一方、千田氏(本来嫡流、肥前千葉氏の組)、千田荘内在地武士との紛争も抱えていた。
- * 建武二年(一三三五)中先代の乱では、**尊氏による反新政の挙兵に千田胤貞**が、尊氏追討の新田軍に千葉介貞胤が参加
- * 建武三年(一三三六)劣勢の尊氏が勢力を挽回し(千田胤貞同行)、後醍醐天皇と講和。**千葉介貞胤**は一定の抵抗の後、結局は**足利方に帰参**。
- * 建武四年(一三三七)二月八日、源平闘諍録一之下奥書

闘諍録には、建武年間における千葉宗家の政治的危機意識が、如実に反映しているとは言えまいか。

平成三十年度 千葉市・千葉大学公開市民講座

「千葉氏とアイデンティティ——軍記物語の語るもの、近代の人々のいとなみ」

(二〇一九・二・九 千葉大学西千葉キャンパスけやき会館大ホール)

「源平闘諍録」が語る千葉氏のアイデンティティ

源 健一郎 (四天王寺大学)

はじめに

【資料1】源平闘諍録における妙見神と千葉氏に纏わる物語

氏神として千葉氏に尊崇された妙見は、渡る神（菩薩）であった。人が神の下に詣でるのではなく、選ばれた者の下に妙見は渡り、その姿を現し、効験を与えたのである。

最初に選ばれたのは平将門であった。建武四年（一三三七）に書写、文和四年（一三五五）に転写された『平家物語』異本、源平闘諍録によると、承平五年（九三五）八月、上総介良兼の軍勢によって、蚕飼川の端に追いつめられた将門の前に、突然、童子が現れたという。将門一行を向こう岸に渡らせた上、矢戦を援けて勝利をもたらした童子は、正体を上野の花園寺に鎮座する妙見大菩薩と明かし、将門に迎えを請う。こうして妙見は将門の下に渡り、五年の内に将門は東八ヶ国を従える「親王」となったのであった。しかしながら、その結果、将門の本性は「正直」から「諂佞」へと転じ、将門を見限った妙見は、将門の養子である平良文の下に渡ってしまう。妙見の去った将門が滅びる一方、良文の下にあった妙見は、その子、忠頼に渡り、以降、良文流平氏（板東八平氏）の一、千葉氏嫡家（千葉介）に代々伴い、家勢を支えた。

それから時を経て、源平合戦。頼朝の挙兵に応じた当時の千葉介常胤の留守中、平家方、千田判官代親正の率いる大軍が千葉の結城へと進む。これを常胤嫡孫、成胤がわずか七騎で迎えるが、忽ち境川の端に追いつめられる。そこに再び渡り現れたのが、童子に姿を借りた妙見であった。妙見の助力もあって、親正勢は撤退する。妙見の奇跡を耳にした頼朝は、自らの下にも妙見が渡ることを望むが、常胤は、妙見は千葉氏嫡家にのみ渡るものであり、千葉介の帰服こそが妙見からの助力であることを頼朝に説く。

拙稿「千葉妙見の本体・本地説―源平闘諍録と千葉妙見関係資料との間―」

『巡礼記研究』第三集 二〇〇六・九

一 将門―良文故実の機能―渡る神としての妙見―

【資料2】源平闘諍録一之上・一「桓武天皇より平家の一胤の事」

彼の高望に十二人の子有り。嫡男国香常陸大掾、将門が為に誅さる。次男良望鎮守府の将

軍、是れ将門が父なり。三男良兼上総介、将門と度々合戦を企て、終に討たれ了んぬ。四男以下は子無くして、子孫を継がず。第十二の末子良文村岡の五郎、将門が為には伯父為りといへども、養子と成り、其の芸威を伝ふ。将門は八箇国を随へ、弥凶惡の心を構へ、神慮にも憚らず、帝威にも恐れず、檀に仏物を侵し、飽くまで王財を奪ひしが故に、妙見大菩薩将門が家を出でて、良文が許へ渡りたまふ。此れに因つて良文、鎌倉の村岡に居住す。五箇国を領じて、子孫繁昌す。

彼の良文に四人の子有り。嫡男忠輔、父に先立ちて死去し了んぬ。二男忠頼村岡の三郎、奥州介と号す。武蔵国の押領使と為て、上総・下総・武蔵の三ヶ国を領す。下総の秩父の先祖なり。(略)又彼の忠頼に三人の子有り。嫡男忠常、上総国上野の郷に居住せしかど、後には下総国千葉の庄に移つて、下総権介と号し、兩國を領す。其の時、妙見大菩薩は長嫡に属き、千葉の庄へ渡りたまふ。

【資料3】源平闘諍録巻第五・三「妙見大菩薩の本地の事」

常胤畏つて申しけるは、「此の妙見大菩薩と申すは、人王六十一代朱雀の御門の御宇、承平五年〔乙未〕八月上旬の比に、相馬小次郎将門、上総介良兼と伯父甥不快の間、常陸国において合戦を企つる程に、良兼は多勢なり、将門は無勢なり。常陸国より蚕飼河の畔に迫め着けられて、将門河を渡さんと欲るに、橋無く船無くして、思ひ勞ひける処に、俄に小童出で来たりて、『瀬を渡さん』と告ぐ。将門此れを聞きて蚕飼河を打ち渡し、豊田郡へ打ち越え、河を隔てて闘ふ程に、将門矢種尽きける時は、彼の童、落ちたる矢を拾ひ取りて将門に与へ、之を射けり。亦将門疲れに及ぶ時は、童、将門の弓を捕つて十の矢を矯げて敵を射るに、一つも空箭無かりけり。此れを見て、良兼『只事にも非ず。天の御計らひなり』と思ひながら、彼の所を引き退く。将門遂に勝を得て、童の前に突い跪き、袖を搔合はせて申しけるは、『抑君は何なる人にて御坐すぞや』と問ひ奉るに、彼の童答へて云はく、『吾は是れ妙見大菩薩なり。昔より今に至るまで、心武く(慈悲深重にして)正直なる者を守らんと云ふ誓ひ有り。汝は正しく直く武く剛なるが故に、吾汝を護らんが為に来臨する所なり。自らは則ち上野の花園と云ふ寺に在り。汝若し志有らば、速かに我を迎へ取るべし。吾は是れ十一面觀音の垂迹にして、五星の中には北辰三光天子の後身なり。汝東北の角に向かひて、吾が名号を唱ふべし。自今以後、将門の笠験には千九曜の旗(今の世に月星と号するなり。』を差すべし』と云ひながら、何ちとも無く失せにけり。仍て将門使者を花園へ遣はして之を迎へ奉り、信心を致し、崇敬し奉る。将門妙見の御利生を蒙り、五ヶ年の内に東八ヶ国を打ち随へ、下房国相馬郡に京を立て、将門の親王と号さる。然りながらも、正直諂佞と還つて、万事の政務を曲て行ひ、神慮をも恐れず、朝威にも憚らず、仏神の田地を奪ひ取りぬ。故に妙見大菩薩将門の家を出でて、村岡五郎良文の許へ渡りたまひぬ。良(文)は伯父為りといへども、甥の将門が為には養子為るに依つて、流石他門には附かず、渡られたまひし所なり。(略、将門、尊意によつて調伏される)然妙見大菩薩は、良文より忠頼に渡りたまひ、嫡々相ひ伝へて常

胤に至りては七代なり」

【資料4】『千学集抄』

将門平親王ハ、人王六十一代朱雀帝の御時、承平元年に謀反を起せり、陸奥守良文を伴ひて、関東上野国に乱れいり、上野国群馬郡府中花園の村、染谷河といふところ、(略、増水した川を渡りかねていると「小童」が現れ瀬踏みして導く。味方が七騎にまで打ちなされた良文が仏神に祈誓すると、「羊妙見大菩薩」が示現し、敵の上に「剣の雨」を降らせて加勢する。)親王の妃、汝を妊給ふて三月なる頃、「此わかむなんに誕生しなんには、妙見大菩薩の氏子に奉ん」ときせい申給ひしゆゑに、染谷河にあらはる、国香の大軍かなハすして蜘蛛の子を散らすことく失ぬ。(略、その後、花園の七星山息災寺から妙見大菩薩を良文の居所に勧請。)将門の正直、今ハしも諂佞に環れハとて、妙見大菩薩捨給ふなり。

*北斗山金剛授寺尊光院(現在の千葉神社。妙見宮別当寺。千葉氏の本宗家が座主職を継承)に伝来。

千葉家・尊光院の歴史記録。原本(『千学集』)は散失したが、江戸期に抜き書きされたものを、さらに明治期に書写したものが史料編纂所・内閣文庫・金沢文庫に所蔵されている。天正十二年(一五八四、史実は十三年)の邦胤の死がに最後出記事。

*『千学集抄』他千葉妙見社関係資料：妙見は将門・良文連合軍に協力するが、良文のもとに示現した理由は、良文母が妊娠中から妙見に帰依していたためとする。

【資料5】源平闘諍録巻第五・二「加曾利冠者、千田判官代親正と合戦する事」

時に加曾利冠者成胤、(略)「親正の軍兵結城の浜に出で来たる由」人申しければ、成胤此れを聞いて、急ぎ人を上総へ進らせて、(略)俄に七騎を相ひ具し、一千余騎にぞ向ひけり。成胤進み出でて申しけるは、「柏原の天皇の後胤、平親(王)将門には十代の末葉、千葉小太郎成胤、生年十七歳に罷り成る」とて、四角八方を打ち払ひ、脚手・十文字に懸け破り、遥かなる澳に馳せ出でたり。然れども親正は多勢なり、成胤は無勢なる間、両国の堺河に迫め着けられたり。然れども僅なる童有つて、敵が射る箭を中にて受け取りしかば、成胤及び軍兵等にも当たらずして、左右に違へて時を移す程に、両国の介の軍兵共、雲霞の如くに馳せ来たりけり。

二 八幡殿として回顧される義家故実

【資料6】源平闘諍録一之上・九「右兵衛佐頼朝、伊東の三女に嫁する事」

定綱申しけるは、「何に藤九郎殿、御辺は三条の関白謙徳公の御末と聞く。定綱は苟くも宇多天皇の後胤、近江源氏の最中なり。設ひ我等輩に成らんと所望すとも嫌はれじ。況や君は六孫王の苗裔、八幡殿四代の末葉、東国の奴原が為には重代の主なり。設ひ世に無き御身為りといへども、争か仰せを軽んぜんや。然れば則ち、内々仰せられんに、若し用ゐずば、則

ち我等此れを抑へて取るべし」(略) 千鶴と名づけられたり。頼朝言ひけるは、「此の子十五に成らん時、伊東・北条を相ひ具して先陣に打たせ、定綱・盛長を指し廻らし、東国の勢を招き、頼朝都に馳せ上つて、父の敵清盛を打たん」と言ひながら、二所権現・三嶋明神の御宝殿に秘に願書をぞ納められる。

【資料7】源平闘諍録巻第五・四「頼朝、大勢を聳かし、富士河の軍に向かふ事」

右兵衛佐、景時を見たまひて、「頼朝は未だ忘れ遣らず。汝勅勘を蒙つて京都へ召し上せられし時、伊豆の北条に出で来たり、世の中の事共語り合ひし時、『頼朝当国に住しては叶ふべからず。奥州の秀衡の許へ落ち行かんと欲ふ』と云ひしかば、汝の詞に『其の御計ひ有るべからず候ふ。其の故は、君の御先祖八幡殿の御代官権大夫常清の男清衡、奥州の鎮守府將軍に補せられたりしより以来、秀衡は既に四代なり。然れども秀衡、出羽・陸奥を押領して、威猛比ひ無し、有徳身に余れり。全く君を主君と仰ぎ奉るべからず。吾三ヶ年の内に、何なる計りことを為ても京都を逃げ下り、申し合はすべき事有り。其の程は返す返す景時を相ひ待たるべく候ふ。(略)』由約束せしが、契りを違へず罷り下れる志こそ有難けれ」と泣きたまへば、景時も共に泣く。

【資料8】源平闘諍録巻第五・四「頼朝、大勢を聳かし、富士河の軍に向かふ事」

畠山御前に畏つて申しけるは、「重忠白旗を差して参上する条、此れ私の計らひにあらず。君の御先祖八幡殿、貞任を迫めさせたまひし時、秩父の冠者重綱、先陣の大將軍と為て、八幡殿より給はつたる所の旗なり。然る間、吉例為る故に差して参る所なり。(略)」と云々。(略) 頼朝此の由を聞食して、「畠山の申し状神妙なり。必ず勲功の賞有るべし。但し白旗においては文一つ計り改むべし。又八幡殿奥州合戦の時、秩父の冠者重綱を以つて先陣の大將軍と為、鎌倉の権五郎景将を以つて後陣の大將軍と為たり。彼の先蹤を尋ねれば、重忠は先陣為るべし、景時は後陣を打つべし」と言へり。

【資料8a】延慶本第二末・廿「畠山兵衛佐へ参ル事」

重忠申ケルハ、「先小坪ノ軍ノ事ハ、存知之旨、三浦ノ人々ニ再三申置候ヌ。其次第定テ披露候歟。全ク私ノ意趣ニ候ワズ。君ノ御事ヲ忽緒スル事ヲモ存ゼズ。次ニ旗ノ事ハ、御先祖八幡殿、武衡家衡ヲ追討セサセ給候シ時、重忠ガ四代ノ祖父、秩父十郎武綱初参シテ、此旗ヲ指テ御共仕テ、先陣ヲカケテ、即彼武衡ヲ追討セラレニキ。近ハ御舎兄惠源太殿、多胡先生殿ヲ大倉ノ館ニテ攻ラレシ時ノ軍ニ、重忠ガ父、此旗ヲ指テ、即時ニ討落シ候ニキ。源氏ノ御為、旁重代相伝ノ御悦也。仍其名ヲ吉例ト申候。君ノ今日本国ヲ打取セ御シ候御時、吉例ノ御旗指テ参リテ候。此上ハ御計」トゾ陳申ケル。(略)(頼朝ガ) 畠山ニ宣ケルハ、「誠陳申所条々、無謂アラズ。サラバ我、日本国ヲ討平ゲムホドハ、一向先陣ヲ勤ベシ。(略)」

【資料8b】四部合戦状本巻第五「三浦人々頼朝を尋ね合ふ事」

(畠山)「是は、御先祖頼義朝臣、奥州の埴囚を迫めに下りたまひし時、秩父太郎大夫六歳の時にて候に、六月一日を正月の一日と号して『七歳なり』と仰せられて、先陣を賜りし時、此の白幡を賜る。十二ヶ年の御合戦に討ち勝ちて、都へ上らせたまひしかば、『汝が子孫に白幡とば許す』と仰せを蒙りて、今まで絶えず。而れば今、君の御代の初め、御祝ひの御幡を差して参りて候はんに、神妙の御感に預るべしとこそ思ひ候ふに」と憚る所無く申しければ、頼朝聞食して、「畠山は興有る小冠者をこそ持ちたりけれ」とぞ御感有りける。

【資料9】源平鬪諍録一之上・十一「頼朝、北条の嫡女に嫁する事」

右兵衛佐、祈念して申されけるは、「南無皈命頂礼、八幡三所聞食すべし。頼朝の先祖伊与守頼義朝臣、奥州の貞任を迫めし時、嫡男義家を以つて八幡大菩薩の氏子と為し、其の名を八幡太郎と号す。此れに依つて、大菩薩、氏子に至るまで護るべしと云ふ御誓ひ有り。然るに頼朝は是れ八幡殿より四代の氏子なり。然るべくは八幡大菩薩、日本国を頼朝に打ち随はしめ給へ。頼朝の子の敵、伊東入道を打ち取らん」と言ひ了て、二所権現に精誠を致さる。

【資料10】頼朝が重んじた頼義故実

(幕府草創期、頼朝は)頼義故実に基づいて奥州合戦を前九年合戦として演出し、全国から動員した武士達にこの「前九年合戦」を実際に体験させ、頼義の武功を強烈に認識させる一方で、自らを唯一の頼義後継者として位置づける

川合康「奥州合戦ノート―鎌倉幕府成立史上における頼義故実の意義―」

(『鎌倉幕府成立史の研究』二〇〇四 校倉書房 初出一九八九)

【資料11】足利氏が重んじた義家故実

足利宗家による源氏嫡流工作が、このように(講演者注、『難太平記』『満濟准后日記』『親長卿記』等の検討の結果を指す)源頼義の息義家の直系を主張することによって行われた背景には、義家の息、義国から分流した足利氏独自の氏意識をまず想定せねばならないが、それとともに、やはり頼義直系の地位を誇示した頼朝の家系を相対化する政治的意味も考えねばならないであろう。

川合康「武家の天皇観」(『鎌倉幕府成立史の研究』二〇〇四 校倉書房 初出一九九五)

三 十二年合戦の先例が意味するもの

【資料12】源平鬪諍録一之上・一「桓武天皇より平家の一胤の事」

其の子に常将、武蔵の押領使と為る。其の子に常長千葉介大夫、十二年の合戦の時、官兵に駆られ、八幡殿の御共^{みども}に有りしが、海道の大手の大將軍^{だいしゅん}為り。其の子に常兼千葉次郎大夫、

(略) 常兼が次男常重大権介。(略) 其の子に常胤千葉大介、鎌倉殿の左の一の座を給はる。(略) 彼の忠頼が三男将常武蔵権守、秩父の先祖是れなり。其の子に武基秩父別当大夫。其の子に武綱秩父十郎。其の子に重綱権守、秩父冠者と云ひて、十二年の合戦の時、先陣の大將軍為り。其の子に重弘太郎大夫。其の子に重義畠山庄司。同じく舍弟小山(田)別当有重。重義が子に重忠畠山の次郎、鎌倉殿の先陣の大將軍是れなり。

忠光村岡四郎は三浦の先祖たり。其の子に為名三浦平大夫。其の子に為次三浦平太郎、十二年の合戦の時の高兵七人の其の一なり。其の子に義次六郎庄司。其の子に義明三浦大介、重忠が為に討たれ畢んぬ。其の子に義宗根本の太郎。次男義澄別当介。其の子に義村駿河守。忠道平大夫〔鎌倉の先祖なり。〕其の子に景道鎌倉権大夫。其の子に景村鎌倉太郎。舍弟景将権五郎、貞任を迫めし時の高兵七人の内、後陣の大將軍為り。其の子に景長〔実には景村が子なり。〕、其の子に景時梶原平三、羽林頼朝には後陣の大將軍為り。

【資料13】源平闘諍録巻第五・三「妙見大菩薩の本地の事」

又右兵衛佐の言ひけるは、「侍共承るべし。今度千葉小太郎成胤の初軍に先を懸けつる事有り難し。勲功の賞有るべし。頼朝若し日本国を打ち随へたらば、千葉には北南を以て妙見大菩薩に寄進し奉るべし。抑妙見大菩薩は、云何にして千葉には崇敬せられたまひけるにや。又御本鉢は何の仏菩薩にて御座しけるにや。」

常胤畏つて申しけるは、「此の妙見大菩薩と申すは、(略、将門―良文故実、妙見由来) 然妙見大菩薩は、良文より忠頼に渡りたまひ、嫡々相ひ伝へて常胤に至りては七代なり」と申しければ、右(兵)衛佐此れを聞いて、「実に目出たく覚え候ふ。然らば聊頼朝が許へも渡し奉らんと欲ふ。云何が有るべきや。」千葉介答へて申しけるは、「此の妙見大菩薩は余の仏神にも似ず、天照大神の三種の神器の、国王と同じく居たまひてこそ、代々の御門を護りたまふが如し。此の妙見大菩薩も、将門より以来嫡々相ひ伝はり、寝殿の内に安置し奉りて、未だ別家へ移し奉らず。物恠しき不祥出で来るときは、宮殿の内騒動して化異を示し、示現し、氏子を護る靈神なり。一族為りといへども本鉢は永く末子の許へは渡られず。何に況んや、他人においてをや。詮ずる所、常胤君の御方へ参り向かつて仕へたるを、偏に妙見大菩薩の御渡り有ると思食され候へ」と申しければ、右兵衛佐頭を傾けて渴仰を致したまひしかば、侍共身の毛堅つてぞ思ひける。

【資料14】源平闘諍録一之上・四「内と院と御中不和の事」

昔より源平両氏鳥の二つの翅の如く、車の両つの輪に似たり。互ひに朝家に召し仕はれ、国家を護る棟梁なり。然るを、若し皇化に随はず、朝威を軽んずる者には、同じく之を誅罰せしむる間、敢て世の乱れも無かりしに、保元を為義剪られ、平治に義朝打たれし後は、末々の源氏共、少々有りといへども、或いは流され或いは誅され、今は平家の一類のみ繁昌して、更に首を樵す者無し。何なる末の世にも何事か有らんとぞ見えし。

四 何故に『平家物語』であったのか

【資料15】 妙見神威譚の形成時期と源平闘諍録の成立

* 妙見神威譚＝千葉介（千葉氏宗家）を中心とする一族統合のイデオロギー

A 宝治合戦（一二四七）直後から泰胤の没した建長三年（一二五一）までの時期

一族の最有力者上総権介秀胤の滅亡に直面した幼少の千葉介頼胤（亀若丸）に、祖父成胤の弟たちから派生した庶家の統制が求められた。

↓闘諍録の「原本」は「一三世紀半ばないし後半」に「千葉氏仕官の吏僚」によって作成され、その後、闘諍録は九州千葉氏に伝来したとする。

野口実「千葉氏の嫡宗権と妙見信仰―『源平闘諍録』成立の前提―」

『千葉県史研究』6 一九九八・三

B 十三世紀後期～十四世紀初期

千葉介頼胤の晩年、あるいは千葉氏宗家が宗胤系（頼胤長子、千田太郎〔後の肥前千葉氏〕）と胤宗系（頼胤次子、千葉介）に分裂する危機を迎えた。

↓十三世紀末～十四世紀初期の成立。伊豆山権現般若院の影響下にある唱導家集団の関与を想定する。

福田豊彦『源平闘諍録』その千葉氏関係の説話を中心として

『東京工業大学人文論集』1 一九七五・十二

福田豊彦『源平闘諍録』の成立過程―千田合戦と伊藤三女の二説話を中心に―

『千葉県史研究』11別冊『中世の房総、そして関東』二〇〇三・三

C 建武四年（一二三七）から余り隔たらない、早くても十四世紀初頭は遡らない頃

北条体制も瓦解しはじめ、初期の鎌倉北条体制を支えていた板東平氏も多くは滅び、その意識も薄らいできた頃、一方でそのことを強く意識する闘諍録の編者（千葉氏に関わる人物である可能性は強い）が、（略）板東平氏の視点に立つてとらえなおしながら、（略）源平の闘諍の物語を作りあげた

早川厚一『源平闘諍録』と『千学集抄』

『名古屋学院大学論集』人文・自然科学編23・2 一九八七・二

【資料16】 源平闘諍録奥書時期直前における千葉氏周辺の政治情勢

正和三年（一二三四）千田胤貞（宗胤長子）の猶子日祐、中山法華経寺第三代貫主となる。

元亨四年（一二三四）正中の変

元弘二年（一二三二）後醍醐天皇、隠岐配流。千葉介貞胤（胤宗長子）が護送を担当。

元弘三年（一二三三） 千葉介貞胤、反幕府方に加わり、新田義貞とともに北条氏を攻撃。

鎌倉幕府滅亡。金沢北条氏と親交のあった千田荘内在地武士との軋轢。

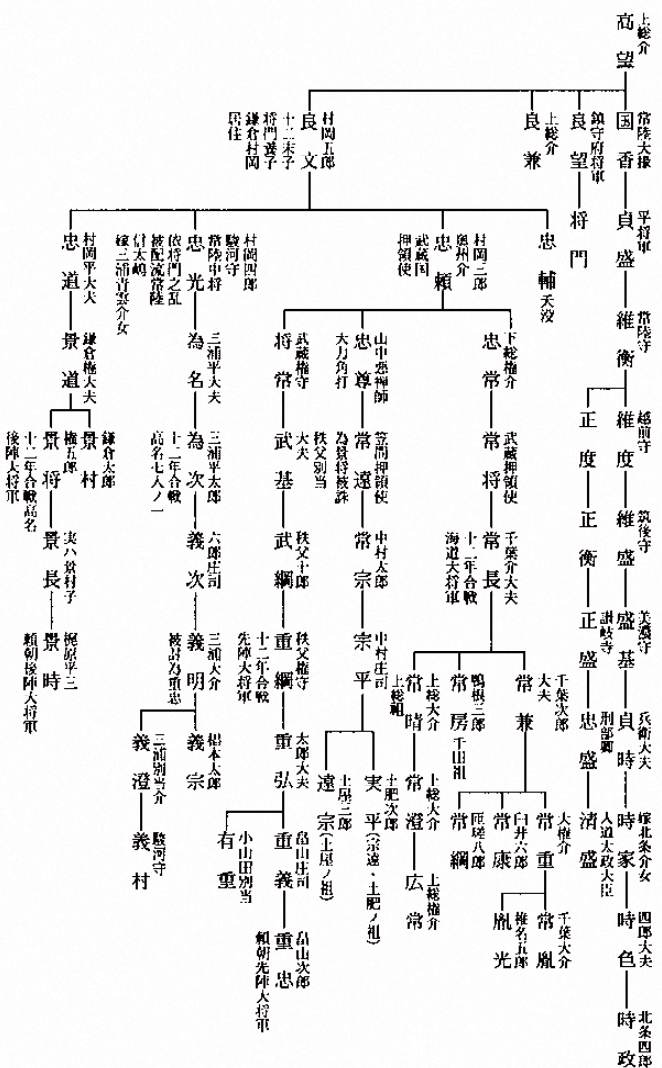
建武元年（一二三四） 建武新政。翌年につけて、千葉介貞胤と千田荘内在地武士、千田荘東禅寺周辺での武力衝突。千田胤貞が帰依する日蓮宗中山門流も千田荘に進出し、東禅寺旦那の在地武士と対立。

建武二年（一二三五） 中先代の乱。尊氏による反新政の挙兵に千田胤貞が参加。尊氏追討の新田義貞軍に千葉介貞胤が参加。その留守中に、千田胤貞と相馬親胤の連合軍が千葉館を攻撃。

建武三年（一二三六） 京都での合戦に敗れた尊氏は九州西下の後、再び東上。千田胤貞同行。尊氏、後醍醐天皇と講和。千葉介貞胤、尊良親王・新田義貞とともに越前へ向かうが、途中で断念し、足利方に帰参（十月）。この頃（十一月）、千田胤貞死没。

建武四年（一二三七） 二月八日、源平閼諍録一之下奥書

「閼諍録」にのせる平家系譜



〔使用テキスト〕

- 源平閼諍録（講談社学術文庫）、延慶本（『延慶本平家物語』本文篇 勉誠社）、
- 四部合戦状本（『訓読四部合戦状本平家物語』有精堂）『千学集抄』（『妙見信仰調査報告書』（二）『千葉市立郷土博物館』『千学集抜粋』）

平成30年度 千葉市・千葉大学公開市民講座 講演録

千葉氏とアイデンティティ

— 軍記物語の語るもの、近代の人々のいとなみ —

平成31年3月発行

発行 千葉市・千葉大学

編集 千葉市立郷土博物館

千葉市中央区亥鼻1-6-1

印刷 株式会社 萌翔社

正 誤 表

- | | | | | |
|----------|----------|---------|---|---------|
| ・ 11 ページ | 下段 10 行目 | 壇上断 | → | 大上段 |
| ・ 13 ページ | 下段 10 行目 | 明治 40 年 | → | 明治 44 年 |
| ・ 15 ページ | 下段 4 行目 | (一戸あたり) | → | 削除 |
| ・ 37 ページ | 下段 21 行目 | 古熊 | → | 古態 |
| ・ 40 ページ | 下段 16 行目 | 、、 | → | 、 |